石川条里的遺構
上駒沢遺跡

1984.2

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

序

地球上での人類の起源をたずねると、200万年もの悠久の彼方に幾つかの人類の足跡を認めることができます。この間に、人は火を使い、石器を作り土器を焼き、やがて金属器の文化を築き上げて来ました。しかるに、長野盆地とその周辺の地域にあっては、旧石器時代の終末期1、2万年以前に、野山に獣を追い、河や湖で魚をとった足跡が認められ、以来、この厳しい自然の中で生きる努力を重ねて来たところです。しかし、この間にくり広げられた苦しみに満ちた自然とのかかわりや、人と人との権力的な関係を詳細に知ることは大変に困難です。

特に、考古学が過去から築き上げて来た学術的な研究法により実施して来た現地踏査や発掘調査により解明しなければならない分野にあっては、断片的ではあれ、その時代時代の動かし難い資料をいくつか確認し、これ等の資料を総覧するとき、大きな歴史の流れを承知できることに期待しながら、考古学研究者や関係者の地道な調査は続けられて来ました。しかるに、最近の地域開発の様相は、地中に埋まり、長い過去の歴史を今に伝えてくれる遺跡すら、その状況を変えてしまうほどに大型化し、文化財保護の本来の姿ともいえる現況保存がむずかしくなって来ました。この事実に対応すべく、当調査会にあっては、予想される開発等の工事については、年間に数箇所にも及ぶ緊急発掘調査を実施して来ました。これは、現況保存を第一として検討しながらも、それが不可能な場合に限定しての次善の策としての記録保存の措置をしなければならないためです。

今回、調査の結果として報告する遺跡、篠ノ井川柳地区団体営圃場整備事業該当地及び上駒沢地区団体営圃場整備事業該当地は“石川条里的遺構„“上駒沢遺跡„ として、古くから研究者の注目を集めたところでした。前者にあっては、川柳将軍塚古墳や、古代から強力な支配権を持った豪族を思わせる布目瓦の出土した遺跡も確認された地域に隣接する条里制の遺構であり、後者は、稲作とのかかわりを思わせる、古墳時代初めの祭祀遺跡に近い遺構であります。これらは、ともに長野盆地の古代の歴史を解明するための重要な遺跡であることは言うまでもありません。

時代に求められ開発を進めるための最低限度の調査に止めました結果をここにまとめ発表いたしますが、これが古代史究明のための基礎資料として多く活用されることを期待してやみません。

なお、この調査のため御協力いただいた地元の関係者のみなさまはじめ、学術調査のため直接・間接参加された調査会、調査団の各位の御協力に深謝いたします。

昭和59年２月

長野市教育委員会教育長
長野市遺跡調査会長　中　村　博　二

例　　言

1　本書は下記の昭和58年度事業にともなう緊急発掘調査及び試掘調査報告書である。

篠ノ井川柳地区団体営圃場整備事業（石川条里的遺構）

上駒沢地区団体営圃場整備事業（上駒沢遺跡）

2　調査は各事業者と長野市教育委員会との契約に基づき、長野市遺跡調査会に委託され、調査会が調査団を編成して実施した。

3　資料整理は主に青木が担当し、各章の執筆は調査団内で分担した。文責は文末に記した。なお、石川条里的遺構花粉分析は「パリノ・サーヴェイ株式会社」「東京都中央区日本橋室町３－２）に委託し、分析報告書を第２章第２節－５とし、第３章第１節－１は和田博氏（長野市立博物館専門主事）に御執筆いただいた。

4　遺物番号は挿図・図版ともに合致している。

5　遺物実測図中、スクリーン部分は黒色処理を、１点鎖線は施釉の範囲を表している。

6　土層断面図中水糸線上の数字は海抜標高を表している。

7　調査の諸記録及び遺物は長野市立博物館において保管している。

8　本書の作成においては矢口が総括し、編集・印刷関係の業務は長野市教育委員会が担当した。

目　　次

序
例　言
第１章　調査にいたる経過 …… 1
第１節　石川条里的遺構の調査 …… 1
第２節　上駒沢遺跡の調査 …… 1
第３節　調査会及び調査団 …… 2
第２章　石川条里的遺構 …… 3
第１節　遺跡周辺の環境 …… 3
第２節　調査内容 …… 7
1　調査経過と調査概要 …… 7
2　基本土層序 …… 7
3　畦　畔 …… 8
4　遺　物 …… 17
5　花粉分析 …… 19
第３節　考　察 …… 28
1　埋没水田地割の復原 …… 28
2　埋没水田の年代 …… 31
第３章　上駒沢遺跡 …… 33
第１節　遺跡周辺の環境 …… 33
1　地理的環境 …… 33
2　考古学的環境 …… 33
第２節　調査内容 …… 37
1　調査経過と調査概要 …… 37
2　試掘坑 …… 37
3　遺　物 …… 40
4　小　結 …… 40

挿図目次

第１図　石川条里的遺構周辺の地形……4
第２図　石川条里的遺構調査対象地及び地形……6
第３図　基本土層図……7
第４図　第18・19号畦畔実測図……10
第５図　第20号畦畔実測図……11
第６図　第21号畦畔実測図……11
第７図　第３トレンチ断面図……12
第８図　第24号畦畔実測図……12
第９図　第25号畦畔実測図……12
第10図　第26号畦畔実測図……13
第11図　第27号畦畔実測図……13
第12図　第28号畦畔実測図……14
第13図　第29号畦畔実測図……14
第14図　第６トレンチ断面図……15
第15図　第７トレンチ断面図……15
第16図　石川条里的遺構遺物実測図……18
第17図　石川条里的遺構埋没畦畔位置図……29・30
第18図　上駒沢遺跡周辺の地形……34
第19図　上駒沢遺跡調査対象地及び地形……36
第20図　上駒沢遺跡トレンチ配置図……38
第21図　第２トレンチ断面図……39
第22図　第２トレンチ出土遺物実測図……39

第１章　調査にいたる経過

第１節　石川条里的遺構の調査

石川条里的遺構は北限を上石川・下石川部落、南限を平久保・山崎部落とする水田地帯全域に残されるもので、現在の水田畦畔の1.5㎞四方にわたってその痕跡をうかがうことができる。特に下石川部落に南接する水田では、東西５町、南北４町の条里的景観が良好に保存されており、本条里的遺構を代表する地域として著名である。条里的遺構の範囲については、現在の水田区画と字名等の検討によるものであるが、条里景観の存在しない地域に関しても、かなり広範囲にわたり条里的区画が過去に施行されていた可能性が指摘されており、不確定の部分が多いと言えよう。

現存する条里景観の一部を含み、それに隣接した地域、二ッ柳に続く農免道と国鉄篠ノ井線に沿った水田地帯東西600ｍにわたり、篠ノ井農業協同組合により圃場整備事業が進められている。57年度施工に際しては、委託を受けた市教育委員会・遺跡調査会が57年12月１日より同７日にわたり試掘調査を実施した。掘削した試掘坑総長275ｍ中、地表下約１ｍ、砂層におおわれた状態で畦畔様遺構を18ヶ所検出するに至り、磁北を基準とした南北・東西方向の条里的区画によるものと推定された。これにより、圃場整備事業対象地の大半を占める所の条里的景観が地表面に遺存しない地域においても、埋没した条里的水田遺構の存在する可能性が強く示唆されたのである。

本調査は57年度調査結果に基づき、篠ノ井農協、県教育委員会文化課、市教育委員会社会教育課の協議を経て、市教育委員会・遺跡調査会が受託したものであり、58年度施工予定地を対象とし、破壊の予想される部分についての記録保存を目的として実施されることとなった。

第２節　上駒沢遺跡の調査

長野市東北部上駒沢地区においては、長野平農業協同組合により15.6haにわたり圃場整備事業が計画され昭和58年度の着手が予定された。当該地は浅川扇状地遺跡群の範囲の東端にあたり、隣接して駒沢祭祀遺跡等が存在し、市教育委員会の踏査によってもわずかながら遺物の散布がみられた。このため圃場整備対象地が埋蔵文化財包蔵地である可能性が認められた。

57年８月31日に、長野平農協、県教育委員会文化課、市教育委員会社会教育課の協議を経て、58年度着工部分につき施工に先立ち試掘調査を実施し、事業対象地における埋蔵文化財保護対策に備えることが決定され、調査の実施が市教育委員会・遺跡調査会に委託されるに至った。なお、圃場整備事業対象地のほぼ中央を流れる中小河川「新田川」の改修事業も同時に実施され

る予定となっており、試掘調査の対象地にこの部分も含めることとした。

第3節　調査会及び調査団

長野市遺跡調査会は、市内所在の埋蔵文化財等遺跡発掘調査の調整企画及び、それに基づく発掘調査・分布調査を実施し、その記録作成と発掘された文化財の保存活用について研究することを目的として設立されているもので、長野市教育委員会より委託を受け、各遺跡調査団を編成して調査を実施するものである。

調査会　会長　中村　博二（長野市教育委員会教育長）
　　委員　米山　一政（長野市文化財保護審議会長）
　　桐原　　健（長野市文化財保護審議会委員）
　　小池　淳美（長野市教育委員会教育次長）
　　関川千代丸（長野市教育委員会文化財専門主事）
　　矢口　忠良（長野市立博物館主査）
　　監事　関口　　仁（長野市教育委員会庶務課長）

調査団　調査団長　矢口　忠良（長野市立博物館主査・日本考古学協会員）
　　調査主任　山口　　明（長野市立博物館主事・日本考古学協会員）
　　調 査 員　青木　和明（長野市立博物館主事）
　　中殿　章子（長野県考古学会員）
　　横山かよ子（長野県考古学会員）
　　前角　和夫（奈良大学生）
　　義家　和彦（早稲田大学生）
　　調査参加者　北村　秀一、北村　利雄、北村　政春、北山　頼治、花立　英雄、
　　矢島　善治、矢島　忠恒、矢島　憲之

事務局　事務局長　戸津　幸雄（社会教育課長）
　　事務局員　吉池　弘忠（社会教育課長補佐）
　　早川　　理（社会教育課主査）
　　青木　和明（博物館主事）

調査の実施においては長野県教育委員会文化課の指導助言をいただき、整理作業では長野市立博物館諸氏の協力を得た。また、長野県史刊行会諸氏及び春日学氏より多くの御教示をいただき、記して感謝申し上げる次第である。　（事務局）

第２章　石川条里的遺構

第１節　遺跡周辺の環境

本遺跡成因の根幹をなすものが、旧千曲川の河川敷（後背湿地）であることと、聖川からの引水が可能であり、更に集落地として広範囲の自然堤防が発達していることを、第１次調査報告書でふれたところである。

ここでは本遺構をとりまく周辺の遺跡について簡略して記することにする。

まずこの地で水稲栽培による生産力が高かったことを雄弁に物語る資料として古墳から瞥見してみる。長野盆地で更埴市の森将軍塚古墳と築造年代・規模とも対比される川柳将軍塚古墳が本遺跡中央部を見下す湯の入山南端の山頂部に築造されている。全長93ｍを測る古式の前方後円墳で、主体部は寛政年間にあばかれ、異体字日月銘内行花文鏡他26面(『信濃奇勝録』）の鏡鑑及び筒形銅器・琴柱形石製品・石突形石製品・勾玉・管玉・ガラス小玉などが出土した点でも著名である。おそらく石川・塩崎を中心とした地域の盟主的な古墳であろう。この古墳から尾根にそって200ｍ程のところに姫塚古墳がある。未掘の古墳と考えられており内容は明確になっていないが、全長32ｍ程の前方後方墳で、川柳将軍塚や他の古墳とのかかわりの究明が今後の課題である。これに続く古墳には篠山山麓の低位地に築かれた中郷神社古墳がある。この古墳も全長42ｍを測る前方後円墳であるが、前方部の巾が増大しており、前記したものより新しい時期の所産であることは間違いないところである。主体部及び出土遺物等は明確になっていない。６世紀以降になると長野盆地にも新たな墓制が伝わって来る。横穴石室を有する円墳がこれにあたり、やがて群集化する。北の方からみると、川柳将軍塚古墳の東斜面に陪塚とも考えられている湯の入古墳群（７基)、布制神社前面に２基からなる宮下古墳群、その左側に大田和古墳群（３基)、更に谷をへだてて鐙坂古墳群（６基)、聖川を越えて虚空蔵平古墳群(３基)、河越池の上方に池の上古墳、丸山古墳群(４基)がある。これらの古墳群は山腹立地で、現在畑地・果樹園になっており、その開墾時に墳丘が削り取られたり破壊を受け、満足に形態を知りうるものは湯の入古墳群と池の上古墳ぐらいである。また学術調査を経た丸山４号古墳に副葬品が確認されているのみで、他のものは不明である。全壊した古墳群に中郷神社古墳の乗る上見林の台地上に八ッ塚古墳群(８基)がある。遺物は１号墳から出土したと伝えられる直刀・勾玉・丸玉・金環・須恵器がある。この他本調査地と関係ある特異な古墳に飯縄社古墳・四之宮将軍山古墳が山頂上につくられている。前者は径16.5ｍ、後者は径32ｍを測り比較的大型の円墳である。また横穴式石室の墓制をとり入れていないところから他の円墳とは異なり、古い時期の所産と考えられる。前者からは漢式鏡・直刀・留金具・小玉・土師器が出土し、布制神社が所有している。

第1図　石川条里的遺構周辺の地形(1:20,000)

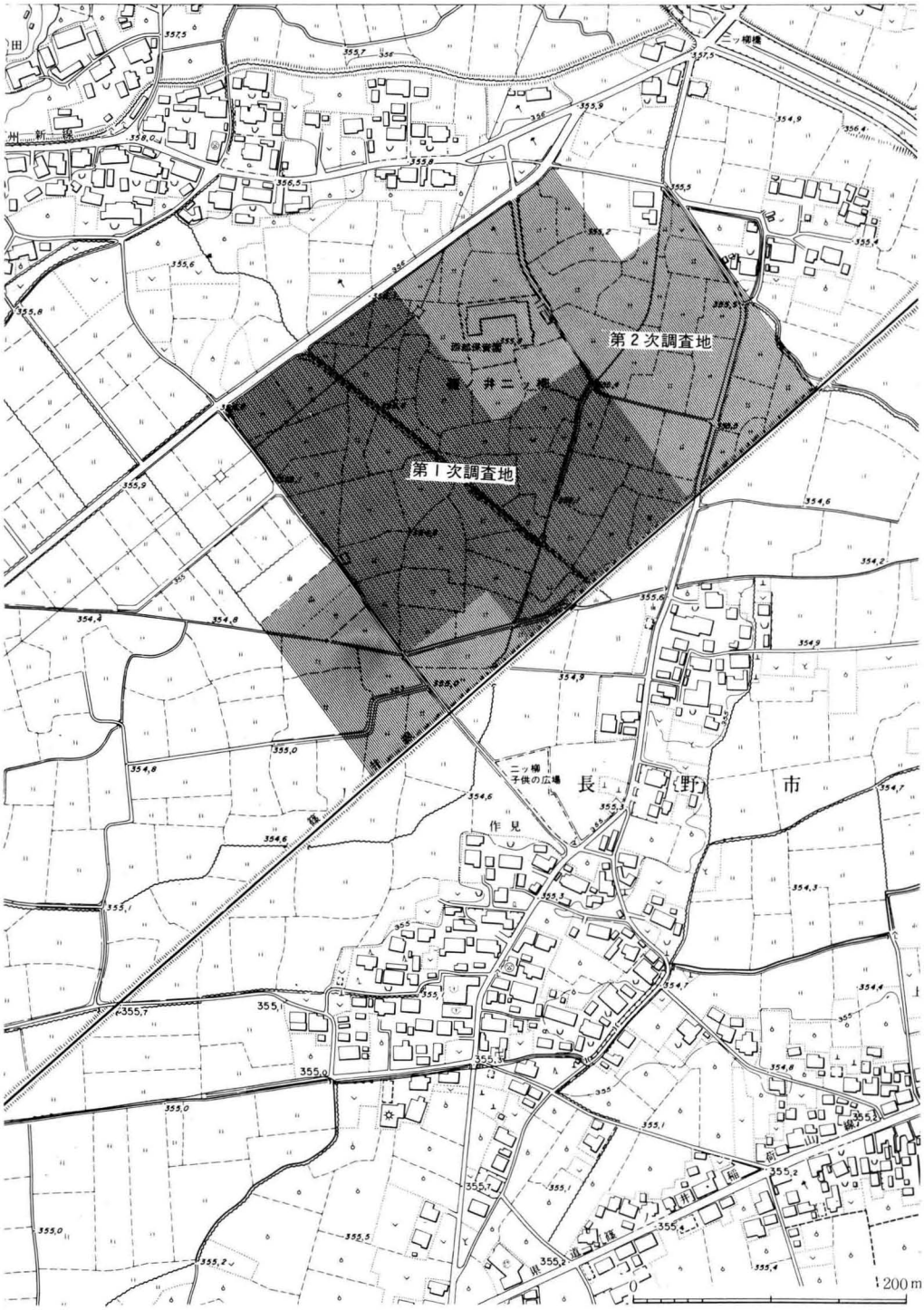
参考写真：塩崎小学校遺跡

これらの古墳の立地する西側山麓には、奈良時代の所産である湯の入須恵器窯跡、平安時代に建立されたであろう上石川廃寺跡がある点注目される地域でもある。

これにたいし対岸の自然堤防上には、弥生時代以降の大集落が確認されつつある。塩崎遺跡群のうち代表的なものに、荒井藤四郎氏によって採集され当地域での弥生文化波及期のものと考えられる土器群を出土した伊勢宮遺跡があり、中条遺跡からは弥生時代後期の埋甕炉を有する住居址が発見されており、また松節遺跡からは時代比定の上に若干問題を残すが銅鉾および石製模造鉾が出土しているなど弥生文化を知る上で重要な遺跡である。学術調査を受けたものには塩崎小学校遺跡がある。この調査は昭和55年から３次にわたって実施され、弥生時代住居址14軒・方形周溝墓１基・溝址２ヶ所・土壙６基、古墳時代では、前期１軒・後期29軒の住居址、奈良時代では住居址16軒・掘立柱建物址３棟、平安時代では住居址19軒が重複関係をもって検出され、遺構の過密ぶりがうかがえる。

篠ノ井遺跡群での調査は聖川堤防にそってここ数年調査が実施されており、この調査地から弥生時代後期から平安時代の住居址および弥生時代末期の方形周溝墓２基が検出され、副葬品に鉄釧・刀子などがそえられている例も確認されている。この他、条里的遺構に関与しているものと考えられる溝址、中世の所産と考えられる井戸址が多数発見されている。

このように本調査地をとりまく考古学的環境は各時代の重要な要素を含み、時間的・空間的にまとまりをもった最少の地域である。　（矢　口）



第２図　石川条里的遺構調査対象地及び地形（1:5,000）

第２節　調査内容

1　調査経過と調査概要

調査方法は昨年度と同様に、施工により遺構の破壊のおそれがある水路と道路部分に限り、試掘坑掘削により遺構を確認する方法を採用した。あわせて必要に応じトレンチの拡張を行い、遺構を平面的に検出するものとした。

発掘は58年８月27日より開始し、重機により第３～７トレンチの計５本の試掘坑(総長350ｍ)を掘削した。予想されたとおりの激しい湧水のため作業は難行したが、前回と同様に条里的区画によるものと思われる畦畔様遺構が各試掘坑において確認された。このうち第３～５トレンチに関しては、遺構部分について部分的拡張発掘を行った結果、磁北を基準とした南北・東西方向の畦畔と水田面を平面的に検出するに至った。各試掘坑内における畦畔番号は第１次調査からの通し番号とし、第１次調査１号～17号畦畔、第３トレンチ18号～23号畦畔、第４トレンチ24～27号畦畔、第５トレンチ28号～29号畦畔、第６トレンチ30号～34号畦畔、第７トレンチ35号～39号畦畔と命名した。このうち21号畦畔と28号畦畔からは畦畔脇の水田面より遺物を検出することができ、特に28号畦畔からは10枚重ねの須恵器坏・墨書をもった土師器坏が出土し、畦畔埋没年代を特定する重要な資料となった。検出された遺構22ヶ所は、拡張部分については平板測量、試掘坑断面については土層断面図作成を実施した。また、第３トレンチ及び第６トレンチにおいては、それぞれ任意の箇所で、花粉分析用の土壌試料を採取した。その後、各試掘坑及び遺構の位置につきトランシットによるトラバー図を作成し、９月５日の埋め戻しをもって作業を終了とした。

2　基本土層序（第３図）

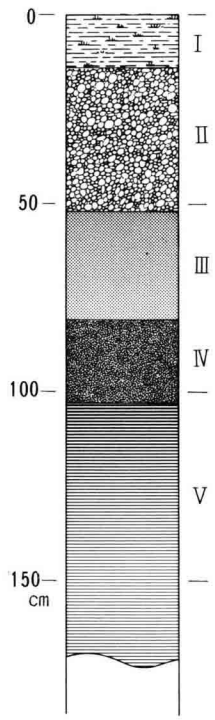
第Ⅰ層　黒褐色粘土、現在の水田の耕作土である。

第Ⅱ層　黒褐色粘土、第Ⅰ層とさほど変化はないが、現在のスキ床下の層とした。

第Ⅲ層　灰黄褐色細砂、千曲川・聖川氾濫時の堆積によるものと考えられる。

第Ⅳ層　黒褐色粘土、第Ⅲ層により埋没した水田層である。

第Ⅴ層　黒褐色粘土、第Ⅳ層から連続的に存在する粘土層であり漸移的にグライ化し、下部ほど青みが増す。また、下部ほど有機質の植物遺体を含む傾向にある。



第３図　基本土層(第6トレンチ内)

第Ⅰ・Ⅲ層を除く各粘土層の形成は、千曲川後背地における沖積土として一般的な状況と考えられる。粘土層にはさまれた状態で存在する砂の堆積の第Ⅲ層に関しては、その形成が特殊な状況下においてなされたものとして考えてよい。特に現在天井川の形態を示す聖川が、その運搬に関与しているらしい点は注意される。２次にわたる調査では、調査地全域にわたって第Ⅲ層の存在が確認されたが、今後の課題として同層の分布を明確にすることがその成因に関しての解明にもあたると思われる。

3　畦　畔

第18・19号畦畔（第４図）

東西方向第18号畦畔と南北方向19号畦畔及びその交差する部分を検出した。畦畔の交差する部分は直交せず、18号畦畔において1.3ｍ、19号畦畔において0.6ｍのズレを観察できる。18号畦畔東部分では、北に向って巾1.5ｍ、高さ10cm程度の台状の張り出しがみられる。また19号畦畔には、交差部から３ｍ南の位置に、巾50～30cmにわたり畦畔が切断された部分が存在し、水口であった可能性が考えられる。

（18号）畦畔巾65～35cm、高さ15～５cm、（19号）畦畔巾100～55cm、高さ15～10cm。

第20号畦畔（第５図）

南北方向の畦畔である。わずかな隆起により検出された。畦畔西側の水田面は19号畦畔東側水田面に接続するものであり、東側水田面に比べて２～３cmの落差をもって低くなっている。

畦畔巾100～75cm、高10cm。

第21号畦畔（第６図）

東西方向の畦畔であり、今回検出した畦畔の中では、最も大きな規模によるものである。形態も特異であって、南側が垂直に近い立ち上がりを有するのに対して、北側がなだらかな傾斜を呈している。また、畦畔頂部も南側が隆起し、中央部でややへこんでおり、畦畔埋没前になんらかの土留めが存在したのではないかと思われた。また畦畔南側水田面では畦畔際から須恵器坏１点を検出した。遺物は水田面直上の砂層中に存在し、水田面からは１cm程度浮いた状態にあった。

畦畔巾210～140cm、高25～20cm

第22号畦畔（第７図）

南北方向の畦畔であり、試掘坑断面のみの検出である。畦畔巾50cm（推定）、高14cm。

第23号畦畔（第７図）

東西方向の畦畔であり、試掘坑断面のみの検出である。畦畔巾65cm（推定）高18cm。

第24号畦畔（第８図）

南北方向の畦畔である。西側の立ち上りが直に近く、東側が崩れているごとき形態を呈し、畦畔の南半の頂部は帯状に突出している。

畦畔巾125～80cm、高20～15cm。

第25号畦畔（第９図）

南北方向の畦畔であるが、東西方向の畦畔と交差する部分にあたり、東西方向の畦畔も一部検出した。畦畔頂部は東側において凹凸が激しく、深さ５cm、長さ20～30cmの長円形のくぼみが４ヶ所観察され、足跡である可能性が考えられる。東西方向の畦畔は方位にやや傾きをもっており交差点は直角でなく鈍角を示している。

畦畔巾95～65cm、高10cm。

第26号畦畔（第10図）

南北方向の畦畔である。南端において畦畔が切断されており、この部分が水口となる可能性も考えられる。畦畔頂部の平端部は狭く巾20cm内外である。

畦畔巾100～75cm、高15～10cm。

第27号畦畔（第11図）

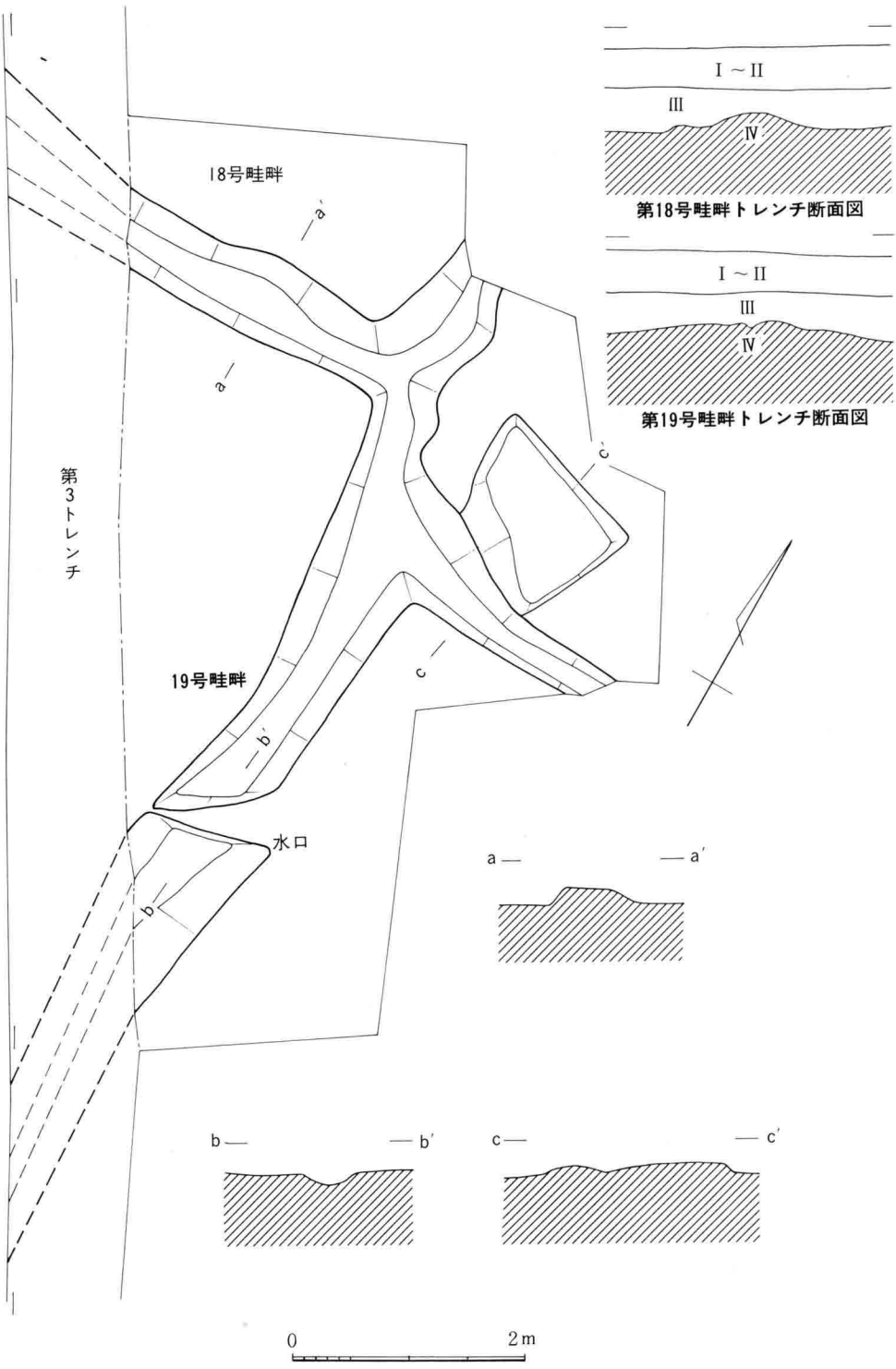
南北方向の畦畔である。トレンチ断面では東西方向畦畔との交差点である可能性も考えられたが、トレンチ掘削により失われており不明である。畦畔北端に最大巾を有し、やや西への彎曲を示している。北端での畦畔頂部平坦部巾は１ｍをはかる。

畦畔巾175～95cm、高25～20cm。

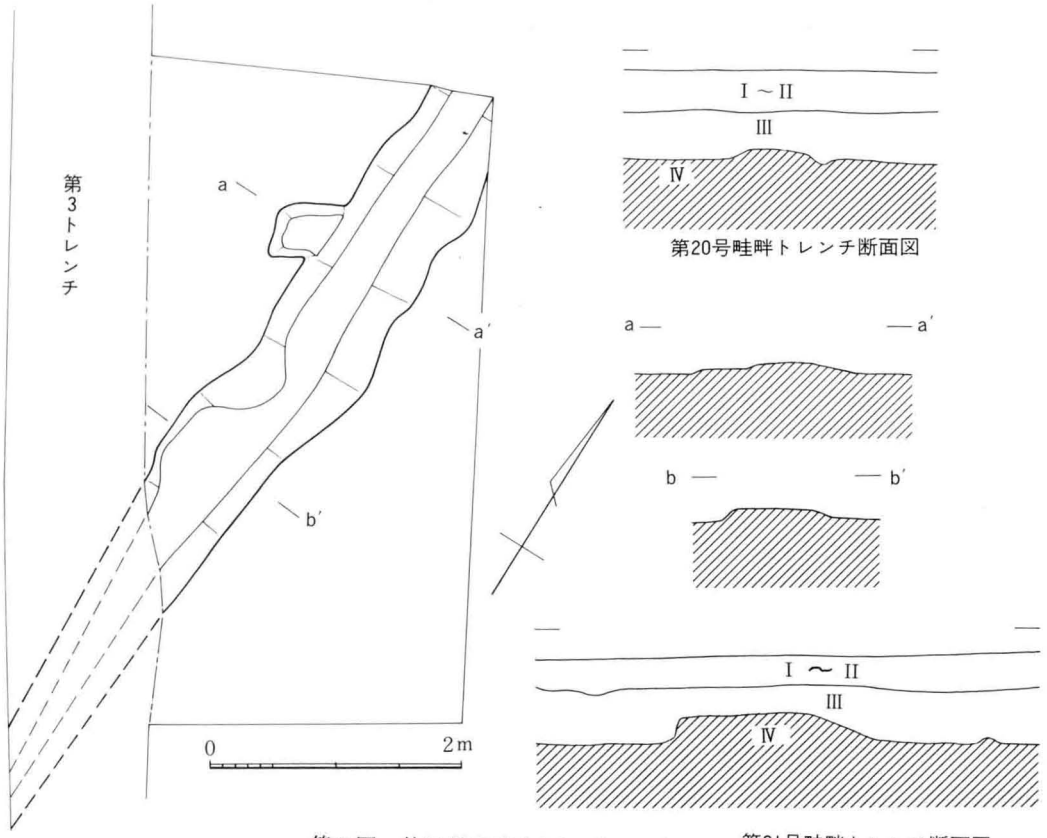
第28号畦畔（第12図）

南北方向の畦畔である。畦畔西側の立ち上りが直に近く、東側はなだらかな傾斜を示す。遺物の遺存が豊富であり、畦畔東側斜面より伏せた状態で土師器坏が、横に転落した状態で10枚重ねの須恵器坏が出土した。須恵器坏は完全に密着した状態で重ねられており、緊縛したままでの埋没が想定されよう。また、畦畔頂部に厚さ１cmの板状木片が畦畔に半ばめり込んだ状態で検出された。なお土師器、須恵器に関しては砂層中の出土であるが、ほぼ畦畔及び水田面に密着しており、畦畔と同時に砂層に覆われ埋没したことが明らかな状態を示している。

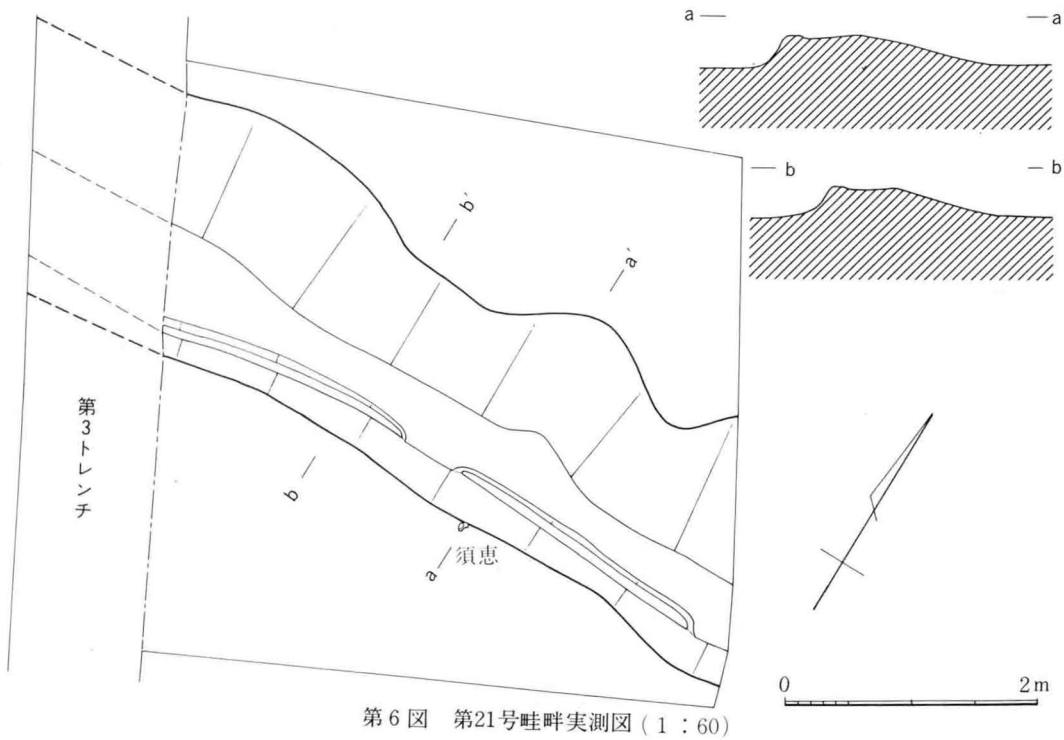
畦畔巾110～90cm、高15～10cm。



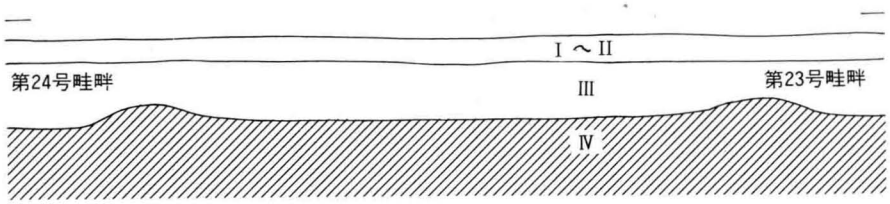
第4図　第18・19号畦畔実測図（1：60）



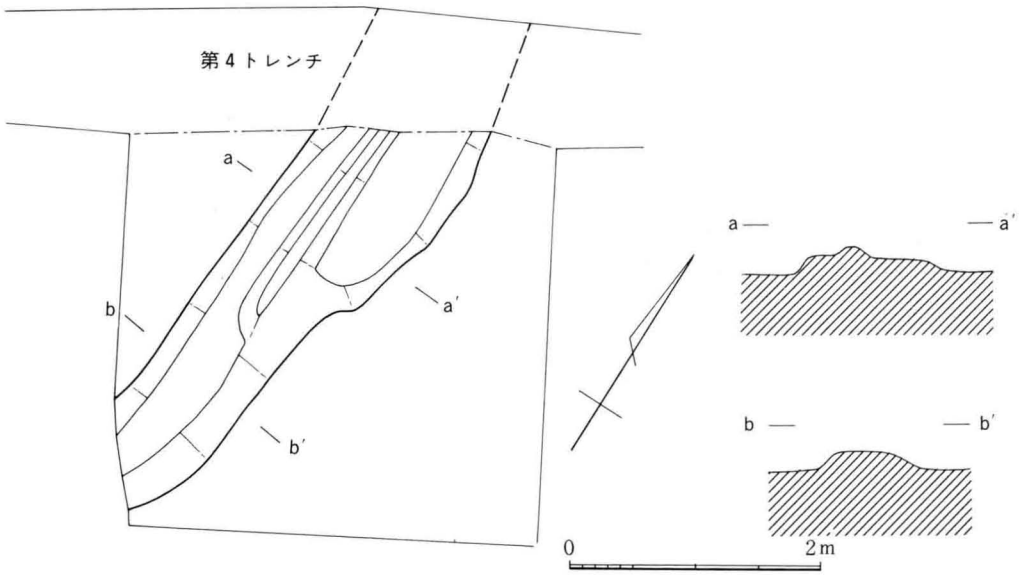
第5図　第20号畦畔実測図（1：60）



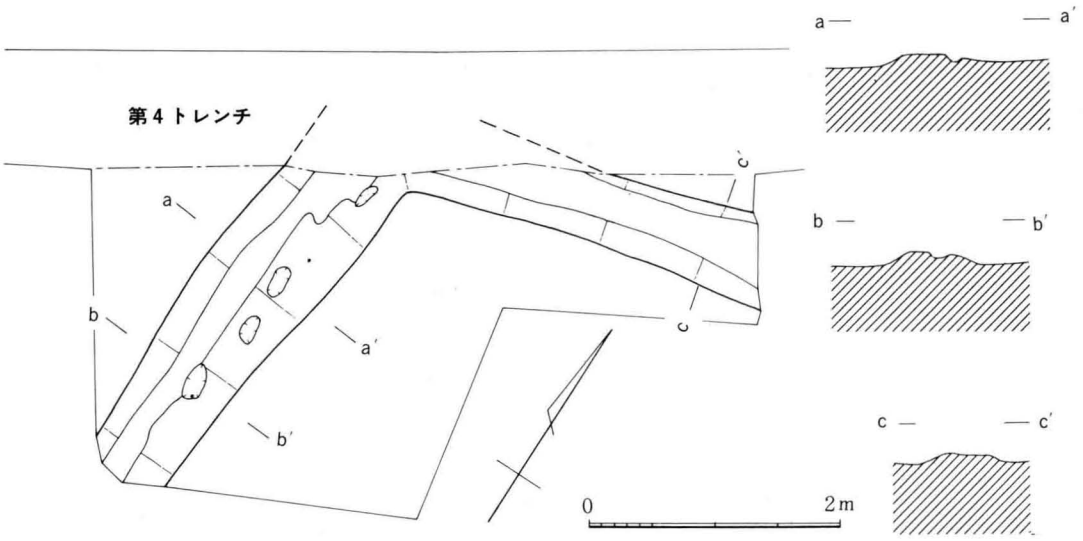
第6図　第21号畦畔実測図（1：60）



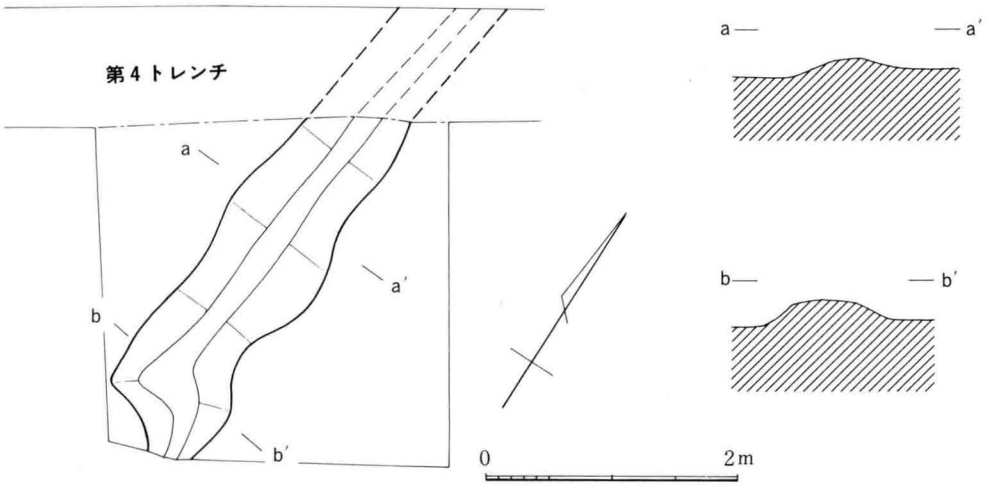
第７図　第３トレンチ断面図（1：60）



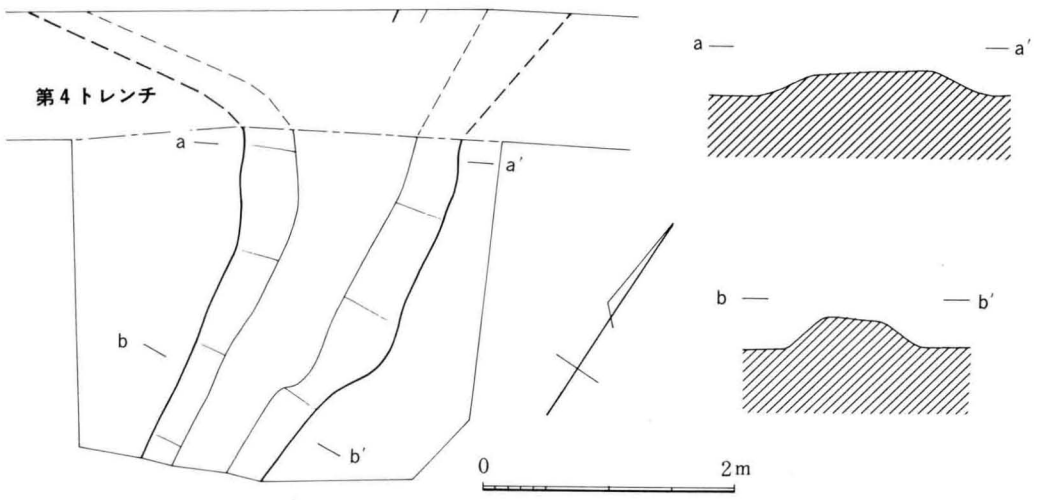
第８図　第24号畦畔実測図（1：60）



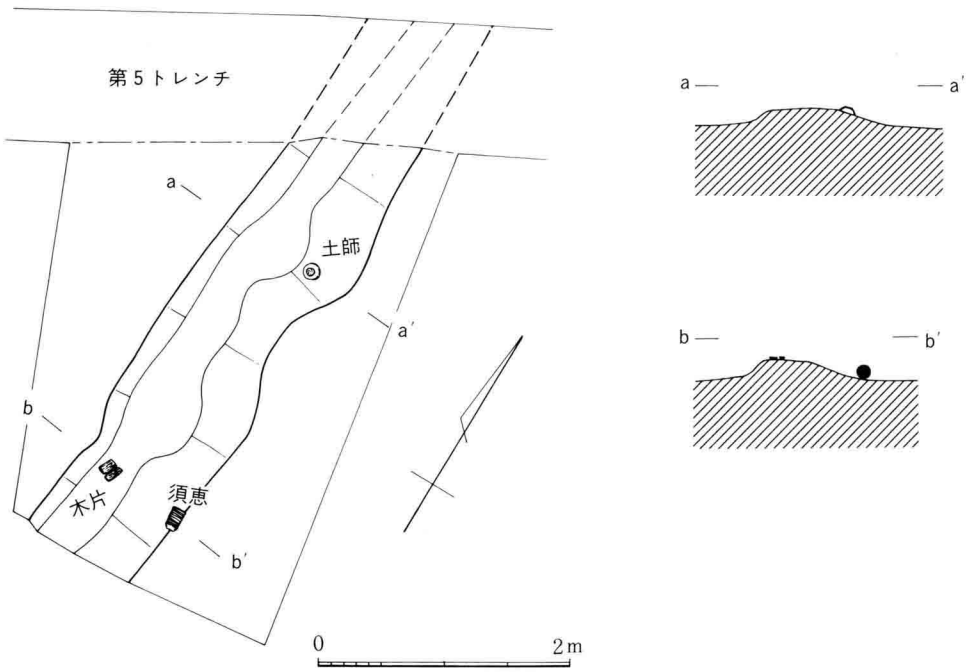
第９図　第25号畦畔実測図（1：60）



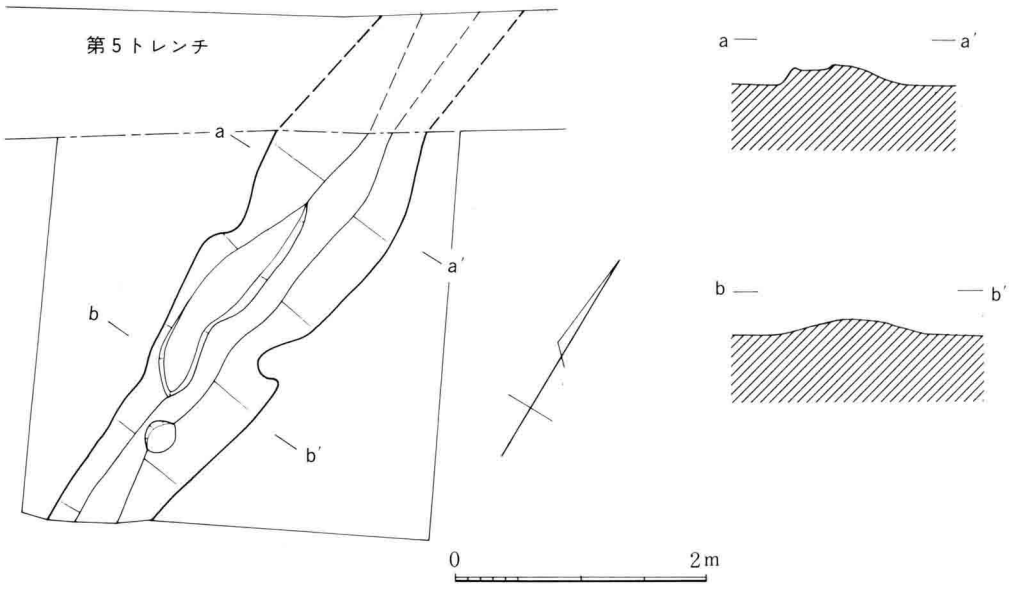
第10図　第26号畦畔実測図（1：60）



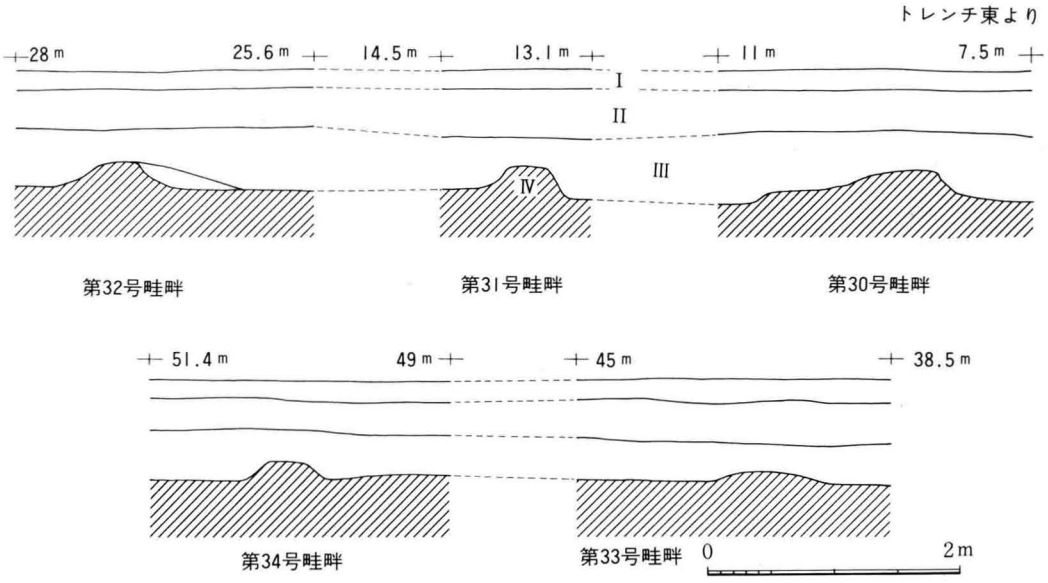
第11図　第27号畦畔実測図（1：60）



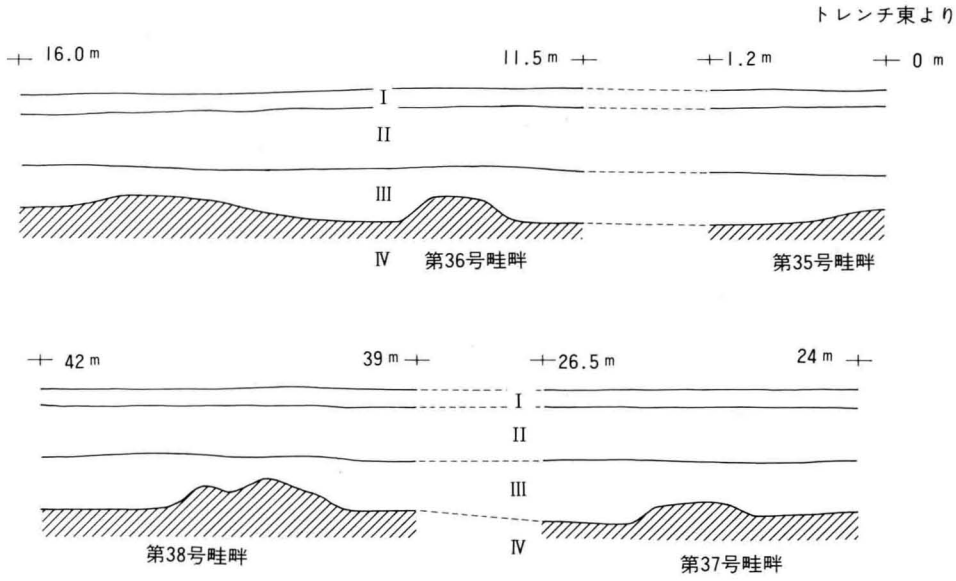
第12図　第28号畦畔実測図（1：60）



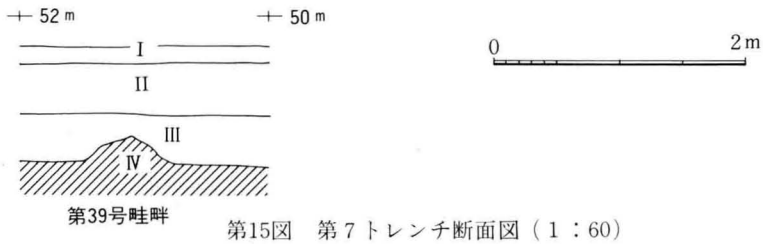
第13図　第29号畦畔実測図（1：60）



第14図　第６トレンチ断面図（1：60）



第15図　第７トレンチ断面図



第15図　第７トレンチ断面図（１：60）

第29号畦畔（第13図）

南北方向の畦畔である。形状はやや乱れており、頂部から西側に向って長さ２ｍのくぼみがみられる。また畦畔裾部もわずかなくぼみにより変形しているが、足跡と想定できるほどの明確さは有していない。

畦畔巾120～75cm、高15cm。

第30号畦畔～第39号畦畔（第14図・第15図）

第６トレンチと第７トレンチの畦畔については全て断面における確認と観察による。このうち第30、38号畦畔が東西方向であり、その他は南北方向と認められた。計測数値は表１に示す。

検出された各畦畔の間隔（＝水田面の幅）を試掘坑毎に求めると表２のとおりとなる。畦畔を磁北を基準とした南北・東西方向と仮定し、各試掘坑断面における斜距離の計測値をもとに、試掘坑方位を計算の上、実際の畦畔間隔を推定したものである。

試掘坑方位は次のとおりである。（Ｎ＝磁北）　第３トレンチ　Ｎ－36°－Ｗ、第４トレンチ　Ｎ－53°－Ｅ、第５トレンチ　Ｎ－53°－Ｅ、第６トレンチ　Ｎ－60°－Ｅ、第７トレンチ　Ｎ－56°－Ｅ　なお表１の畦畔幅推定値もこれに準ずる。

表１　第６・７トレンチ内畦畔(単位：cm)

	畦　畔	方　向	幅（推定）	高　さ
第６トレンチ	30号	東西	96	25
	31号	南北	61	26
	32号	南北	130	22
	33号	南北	78	9
	34号	南北	52	14
第７トレンチ	35号	南北	?	11
	36号	南北	83	20
	37号	南北	83	16
	38号	南西	78	24
	39号	南北	58	21

表２　畦畔間隔測定値（単位：ｍ）

試掘坑	畦畔間	畦畔方向	畦畔間隔	
			断面計測	推定数値
第３トレンチ	18－21	東西	43.8	35.5
	21－23	東西	22.6	18.3
	19－20	南北	18.5	10.9
	20－22	南北	34.4	20.2
第４トレンチ	24－25	南北	12.9	10.3
	25－26	南北	15.4	12.3
	26－27	南北	12.5	10.0
第５トレンチ	28－29	南北	11.6	9.3
第６トレンチ	31－32	南北	13.1	11.3
	32－33	南北	12.4	10.7
	33－34	南北	10.9	9.4
第７トレンチ	35－36	南北	12.5	10.4
	36－37	南北	12.8	10.6
	37－39	南北	25.9	21.5

4　遺　物（第16図）

遺物観察表　　（単位：cm）

番号	種別	口　径	底径	器高	色　　調
1	須恵	12.3	5.6	4.1	灰白～淡青灰色
2		12.3	6.3	4.0	灰白～黄灰色
3		12.3	5.4	4.3	灰白～黄灰色
4		12.4	5.9	4.3	淡青灰～黒灰色
5		12.8	6.2	4.1	灰白～黄灰色
6		12.6	6.2	4.5	灰白～黒灰色
7		12.3	5.9	4.3	灰白～黒灰色
8		12.4	6.0	3.9	灰白～黒灰色
9		12.5	6.3	4.3	灰白～黒灰色
10		13.4	6.3	4.5	灰白～黒灰色
11		(11.9)	6.0	3.7	灰白～青灰色
12	土師	12.8	6.6	4.1	黄灰色・内黒
13	灰釉	(15.5)	－	－	灰白色

（　）内は復原による

1～10、第5トレンチ第28号畦畔出土、10枚重ねで出土した須恵器坏で最上段1から番号順に最下段10の重なり状態であった。すべてロクロ成形により、底部に右回転の糸切り痕をそのままに残す。ロクロ目は外面に顕著であり、内面は平滑に仕上げられている。口線部は直縁的に引き出されているが、2はやや外半する形態を呈している。胎土には砂粒・小石を含みむ。焼成は悪く軟質であり、1～3・5を除き著しい黒斑がみられる。いわゆる火ダスキは認められない。計測値によると10を除外して口径12.3～12.8cmの偏差5mm内におさまり、規格性を抽出することができる。また3・6においては糸切りの際の脆弱な粘土のはみ出しがそのままに残されており、日用品としての使用に供されていない可能性を感じさせる。出土状態から10枚重ねで緊縛された状況を推定したが、同一生産集団による製作である可能性を加味すれば、その埋没状況がさらに興味深いものとなる。

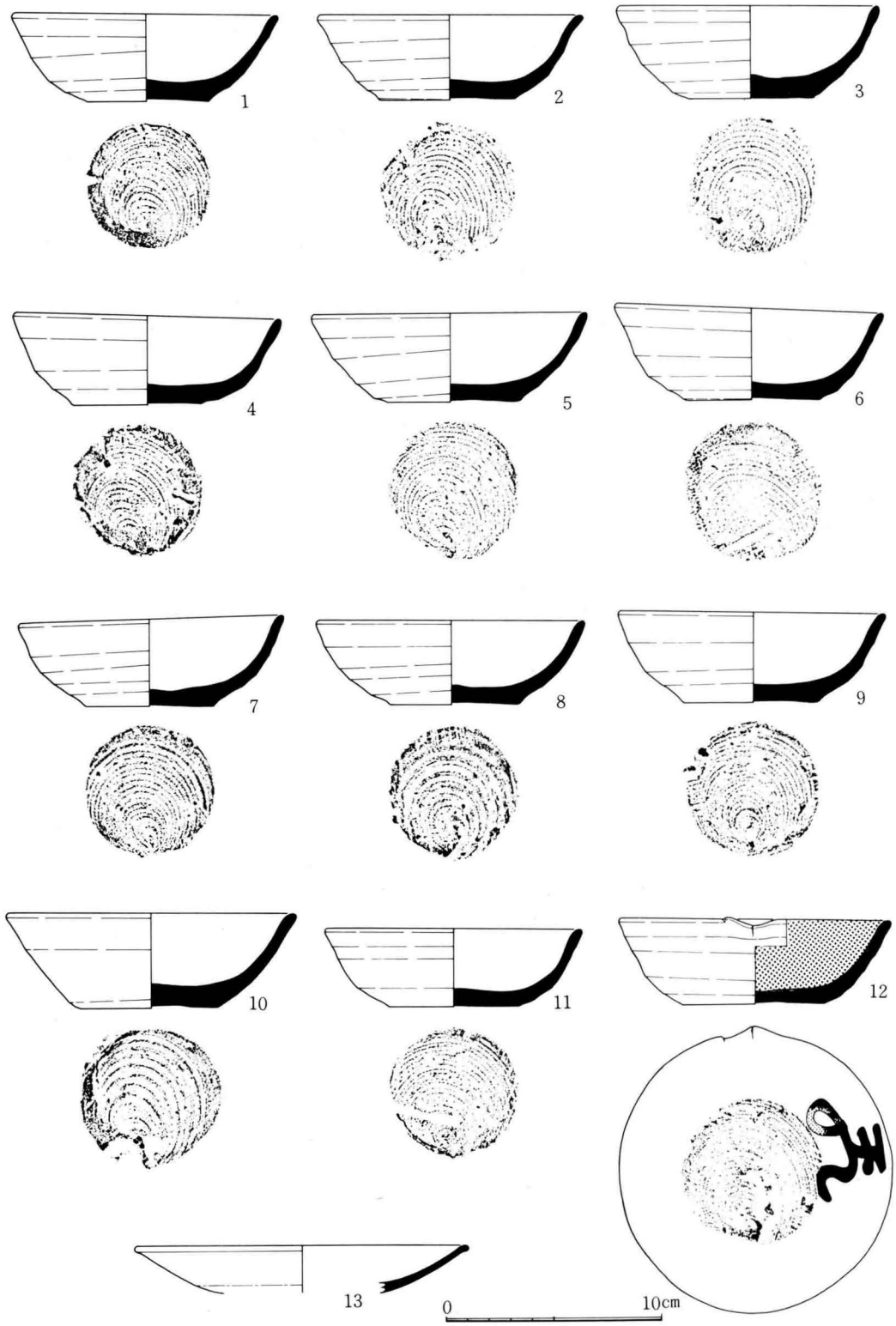
11、第3トレンチ21号畦畔出土、須恵器坏で口縁部1/6を欠く。ロクロ成形により底部に右回転の糸切り痕をそのままに残す。ロクロ目は外面のみである。全体的に磨耗している観がある。

12、第5トレンチ28号畦畔出土、土師器坏であり10枚重ね須恵器から約2m離れて出土した。ロクロ成形により底部に右回転の糸切り痕をそのままに残す。ロクロ目は外面のみであり、内面は黒色処理により磨いている。口縁部には片口状の成形がみられるが、半乾燥時の成形であり、ヒビ割れが2ヶ所に生じている。この片口の向って右面に判読不明の墨書を有する。

13、第5トレンチ28号畦畔水田面出土、灰釉皿で口縁部1/6破片である。高台付と思われ、外面の施釉はその手前で終っている。口縁部は端部で肥厚し外反する。

この他の遺物としては第5トレンチ28号畦畔から長さ10cm、巾5cm、厚さ1cmの板状木片2点が検出されたが、加工痕を観察できず、その用途形状に関しては不明である。土器小破片も2点出土しているが、いずれも磨耗が著しく、その帰属を明らかにすることはできない。

（青　木）



第16図　石川条里的遺構遺物実測図（１：３）

5　花粉分析

第３トレンチ及び第６トレンチに関しては、その土層について花粉分析をパリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。次にその報告を掲載する。

長野市石川条里的遺構試料花粉分析報告

このたび長野市教育委員会殿より、長野市石川条里的遺跡試料の花粉分析の御依頼を受けました。このほど分析が終了しましたので、その結果を御報告致します。

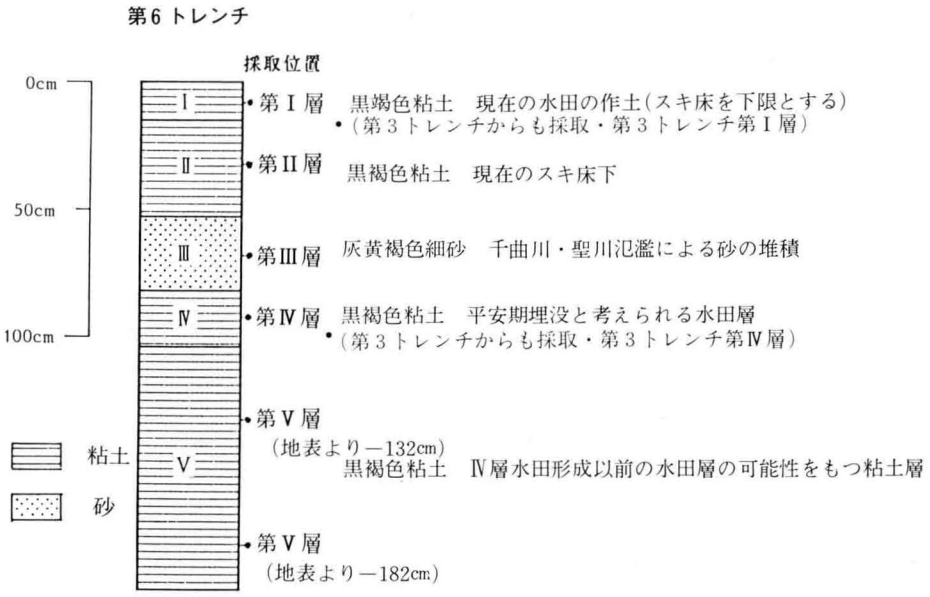
(1)　目　的

長野市篠ノ井二ツ柳において、条里的水田地割に隣接した平安時代に埋没したと予想される条里的水田遺構が発掘確認された。

この遺構が水田遺構であり、平安期の所産であることは考古学的所見によりほぼ確実であるが、花粉分析により　①現水田層と埋没水田層との比較　②埋没水田層の更に下層に水田面が存在する可能性を調査する（添付資料による）ことが目的である。

(2)　試　料

試料は長野市石川条里的遺構の第３トレンチの第Ⅰ層、第Ⅳ層から各１点、第６トレンチの第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層から各１点と第Ⅴ層から２点採取され、合計８点である。第６トレンチにおける試料採取の柱状図は図Ⅰに示した。（添付資料をもとに作成）



図Ⅰ　長野市石川条里的遺構第６トレンチ柱状図

(3) 分析方法

花粉分析の方法は下記の手順で行なった。

○粘土質試料

試料20ｇ秤量→HCl処理→HF処理→重液分離→アセトリシス液処理→KOH処理→グリセリンゼリーにて封入→検鏡

○砂の試料（第６トレンチ第Ⅲ層試料のみ）

試料50ｇ秤量→傾斜法にて砂分除去→粘土質試料のHCl処理以下と同様。

(4) 分析結果及び考察

花粉分析の結果は、各試料における各花粉・胞子化石の検出個体数で表示し表Ⅰに示した。花粉・胞子化石の合計を基数として、ＡＰ－１（針葉樹花粉）、ＡＰ－２（広葉樹花粉）、ＮＡＰ（草本花粉）、ＦＰ（形態分類花粉）、ＦＳ（シダ類胞子）、ＭＳ（蘚類）の比率を同記した。なお、花粉・胞子化石の同定は400～1000倍でＡＰ（樹木花粉）の合計が200個体以上になるまで行なった。ＡＰの合計が200個体未満の試料は、その他の試料と比較して花粉・胞子化石の産出が少なかったものである。表Ⅰをもとに主な花粉・胞子化石についてダイアグラム（図Ⅱ）を作成した。同様に図版16、17を作成したので参照されたい。図Ⅱにおける各花粉・胞子化石の割合はＡＰの合計を基数とした百分比である。

今回の分析で検出された花粉・胞子化石は次に掲げるものである。

ＡＰ－１（針葉樹花粉）

Ａbies（モミ属）、Tsuga（ツガ属）、Pica（トウヒ属）、Larix（カラ松属）、Pseudotsuga（トガサワラ属）、Pinus subgen. Haploxylon（マツ属五葉型松）、Pinus subgen. Diploxylon（マツ属二葉型松）、Pinus（マツ属）、Sciadopitys（コウヤマキ属）、Cryptomeria（スギ属）、Ｔ．Ｃ．Ｔ．（Taxaceae･イチイ科、Cupressaceae・ヒノキ科、Taxodiaceae・スギ科、この３科の中の何れかではあるが判別困難なもの）、Ginkgo（イチョウ属）、Cedrus（ヒマラヤスギ属）。

ＡＰ－２（広葉樹花粉）

Myrica（ヤマモモ属）、Juglans（クルミ属）、Pterocarga（サワグルミ属）、Salix（ヤナギ属）、Alnus（ハンノキ属）、Betula（カバノキ属）、Carpinus（クマシデ属）、Ostrga（アサダ属）、Corylus（ハシバミ属）、Castanea（クリ属）、Dastauopsis（シイ属）、Fagus（ブナ属）、Quercus subgen Lepidobalauns（コナラ属コナラ亜属）、Quercus subgeu Cyclokalanopsis（コナラ属アカガシ亜属）、Celtis（エノキ属）、Apkananthe（ムクノキ属）、Ulmus（ニレ属）、Zelkera（ケヤキ属）、Hamamelis（マンサク属）、Prunus（サクラ属）、Acer（カエデ属）、Aesculus（トチノキ属）、Parthenocissus（ツタ属）、Tilia（シナノキ属）、Elaeagnus（グミ属）、Frarinus（トネリコ属）、Viburnum（ガマズミ属）、Ribes（スグリ属）。

ＮＡＰ（草本花粉）

Moraceae（クワ科、Fagopyrum（ソバ属）、Polygonum sect Persicaria（タデ属サナエタデ節）、Polygonum except Persicaia（タデ属除くサナエタデ節）、Caryophyllaccac（ナデシコ科）、

Chenopodiaceae（アカザ科）、 Amarantkaceae（ヒユ科）、 Tkalictrum（カラマツソウ属）、Ranunwlauae cxcept Tkalictrnm（ キンポウゲ科除くカラマツソウ属）、Cruciferae （アブラナ科）、Rosaceae （バラ科）、Vicia （ソラマメ属）、Leguminosae exccpt Vicia（マメ科除くソラマメ属）、Impatiens （ツリフネソウ属）、Actinostemma（ゴキヅル属）、 Rotala（キカシグチ属）、Trapa （ヒシ属）、Haloragis（アリノトウグサ属）、Myriophyllicm（フサモ属）、Umbelliferae（セリ科）、Nymphaides （アサザ属）、Labiatae（シソ科）、Plantago （オオバコ属）、Campanula（ホタルブスロ属）、Artemisia （ヨモギ属）、Carduoideae （キク亜科）、Cichorioideae（タンポポ亜科）、Alisma（ヘラオモダカ属）、Sagittaria （オモダカ属）、 Blyxa （スブタ属）、Monochoria（ミズアオイ属）、Iridacenc（アヤメ科）、 Aneilema （イボクサ属）、 Eriocaulen （ホシクサ属）、Gramincae（イネ科）、Sparganium（ミクリ属）、Typka（ガマ属）、Cyperaceae（カヤツリグサ科）、Gentianaceae（リンドウ科）。

ＦＰ（形態分類花粉）

Trizanocalpate pollen（三溝型花粉）、Trizonocolporate pollen（三溝孔型花粉）、Inaperturate pollen（無口型花粉）。

ＦＳ（羊歯類胞子）

Lycopodium（ヒカゲノカズラ属）、Ophioglossum（ハナヤスリ属）、Osmunda （ゼンマイ属）、Polypodiaceae（ウラボシ科）、Salvinia natans（サンショウモ）、Monolete spore（単条溝型胞子）、Trilete spore （三条溝型胞子）。

ＭＳ（蘚類）

Sphagnum（ミズゴケ属）

その他の微化石

Pediastru m（藻類）、Botrgococcus （藻類）

次に各試料について述べる。

○第３トレンチ

第Ⅳ層試料

樹木花粉は、コナラ属コナラ亜属（以後コナラ亜属）が多く、ブナ属、T. C. T.（イチイ科、ヒノキ科、スギ科の中の何れか）、エノキ属、ニレ属－ケヤキ属、クマシデ属－アサダ属、スギ属、等を伴なう。草本花粉は、イネ科が非常に多く、ヨモギ属、カヤツリグサ科等を伴なう。水生または湿地性のオモダカ属、ミズアオイ属、ガマ属、等を産出する。シダ類胞子は単条溝型胞子、三条溝型胞子、サンショウモ等を低率で産出する。

第Ⅰ層試料

樹木花粉は、マツ属が顕著に多くスギ属がこれに続く。そして、コナラ亜属、ハンノキ属、等を伴なう。草本花粉は、イネ科が顕著に多く、タデ属、ヨモギ属、カヤツリグサ科を伴なう。シダ類胞子は、単条溝型胞子、三条溝型胞子、サンショウモ、等を僅かに産出する。

○第6トレンチ

第Ⅴ層試料182cm（第6トレンチの地表面よりの深度）

樹木花粉は、コナラ亜属が多く、ツガ属、ニレ属－ケヤキ属、クマシデ属－アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、等を伴なう。草本花粉は、イネ科とカヤツリグサ科が多くヨモギ属、クワ科を伴なう。また、水生および湿地生のオモダカ属、アサザ属、ガマ属、等を伴なう。シダ類胞子は、単条溝型胞子が顕著に多く、サンショウモ、ウラボシ科、三条溝型胞子、等を伴なう。

第Ⅴ層試料132cm（第6トレンチの地表面よりの深度）

樹木花粉は、コナラ亜属が多くブナ属、クマシデ属－アサダ属、T.C.T.（イチイ科・ヒノキ科・スギ科・この3科の中の何れか）、スギ属、ニレ属－ケヤキ属、等を伴なう。草本花粉は、イネ科が顕著に多く、カヤツリグサ科、ヨモギ属、クワ科、等を伴なう。また、水生および湿地生のオモダカ属、ミクリ属、ミズアオイ属、ガマ属、等を伴なう。シダ類胞子は、サンショウモ、単条溝胞子、等を産出する。

第Ⅳ層試料

多少の変動があるものの、Ⅴ層132cmと良く似ている。

第Ⅲ層試料

樹木花粉は、コナラ亜属が顕著に多く、クリ属、クマシデ属－アサダ属、スギ属、T.C.T.（イチイ科・ヒノキ科・スギ科・この3科の中の何れか）、等を伴なう。草本花粉は、タンポポ亜科が顕著に多く、イネ科がこれに続く。そして、ヨモギ属、アカザ科、カヤツリグサ科、等を伴なう。水生または温地生のオモダカ属、ミクリ属、等を産出する。シダ類胞子は少ない。

第Ⅱ層試料

樹木花粉は、コナラ亜属が多く、マツ属、スギ属、T.C.T.（イチイ科・ヒノキ科・スギ科・この3科の中の何れか）、ハンノキ属、クマシデ属－アサダ属、等を伴なう。草木花粉は、イネ科が顕著に多くヨモギ属、カヤツリグサ科、等を伴なう。水生または湿地生のオモダカ属、ヘラオモダカ属、等を産する。シダ類胞子は単条溝型胞子のみで少ない。

第Ⅰ層試料

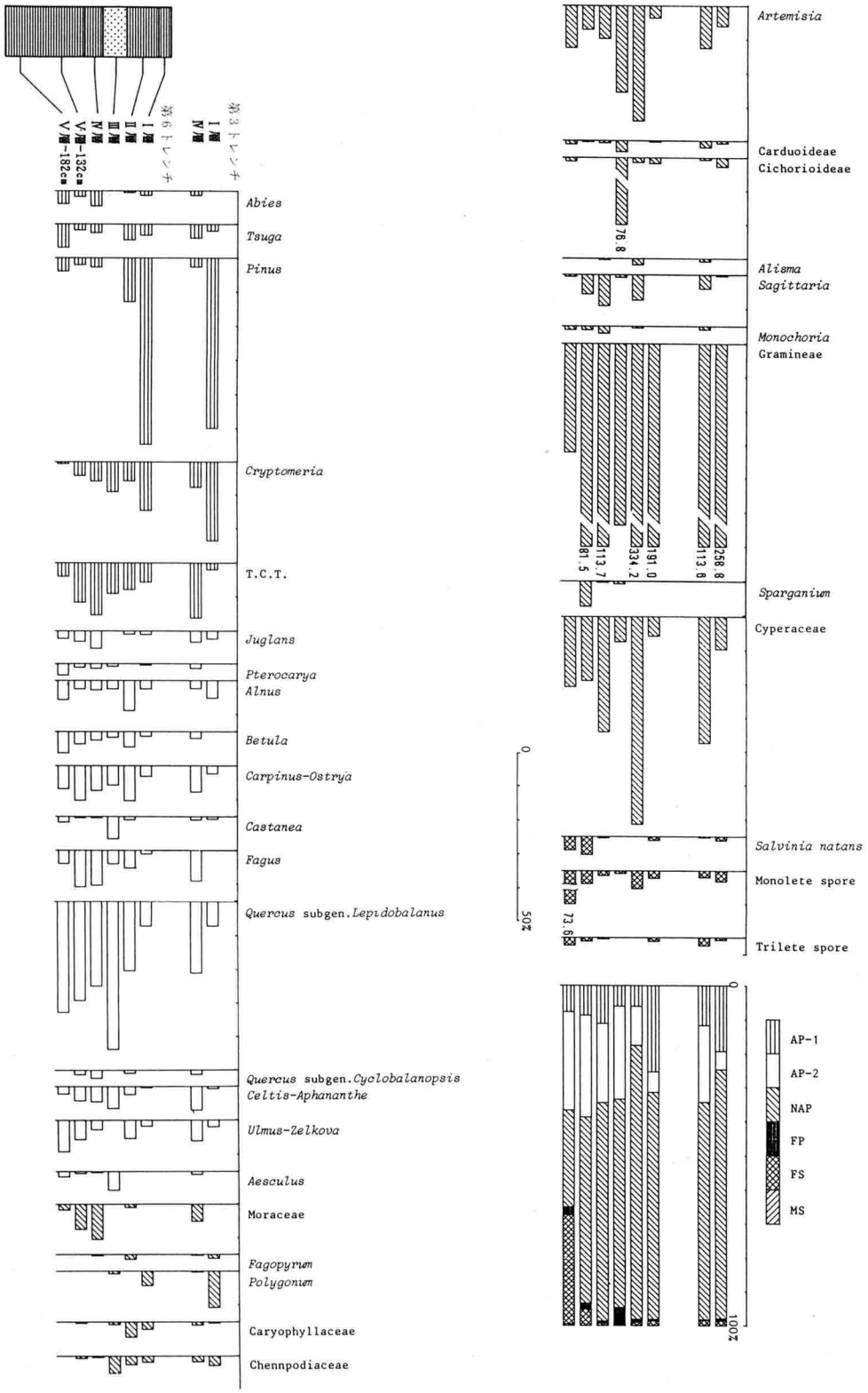
樹木花粉は、マツ属が顕著に多産し、スギ属、コナラ亜属、T.C.T.（イチイ科・ヒノキ科・スギ科・この3科の中の何れか）、クマシデ属－アサダ属、等を伴なう。草本花粉は、イネ科が顕著に多く、タデ属、ヨモギ属、カヤツリグサ科、等を伴なう。シダ類胞子は、単条溝型胞子、サンショウモ、等を産する。

今回の試料は、1982年に分析を行なった長野市川田条里的遺構のⅤ層～Ⅰ層の結果と非常に良く似ている。従って塚田（1981）のRⅢb帯に全層が相当するものと考えられる。長野市川田条里遺構（1982）においてRⅢb帯としたⅤ～Ⅱ層においてコナラ亜属等の広葉樹が比較的高率に出現することに関して、①森林破壊にともなう変化、②他の地層からの誘導化石、③上

表Ⅰ　長野市石川条里的遺構試料花粉分析結果

花粉、胞子化石名 ＼ トレンチ番号及び層位（試料名）	第3トレンチ 第Ⅰ層	第3トレンチ 第Ⅳ層	第6トレンチ 第Ⅰ層	第6トレンチ 第Ⅱ層	第6トレンチ 第Ⅲ層	第6トレンチ 第Ⅳ層	第6トレンチ（地表より−132cm）第Ⅴ層	第6トレンチ（地表より−182cm）第Ⅴ層
Abies		4	4	1		13	5	7
Tsuga	5	12	9	9		7	5	12
Picea		1	1	2		3	1	2
Larix–Pseudotsuga		1		1			1	
Pinus subgen. *Haploxylon*						3	2	
Pinus subgen. *Diploxylon*	19	1	44	6		1	2	
Pinus	106	7	109	20		4	2	7
Sciadopitys		3		3			1	1
Cryptomeria	59	23	41	12	11	17	12	1
T. C. T.	5	48	16	16	11	44	33	7
Ginkgo			1					
Cedrus	1							
AP–1	195	100	225	70	22	92	64	37
Myrica		2		2				1
Juglans	6	10	3	2		15	9	4
Pterocarya		4	1		1	4	3	6
Salix				3		2	3	
Alnus	13	7	7	18	3	8	7	10
Betula		6	4	9	2	7	10	11
Carpinus–Ostrya	6	23	9	21	7	21	29	12
Corylus		1		4		1		1
Castanea	2	3		2	8	1	1	3
Castanopsis					2		1	
Fagus		27	3	11	5	30	31	7
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	18	62	20	41	53	71	82	57
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*		4		2		7	4	
Celtis–Aphananthe	2	21	1	5	8	13	12	4
Ulmus	2	2	1	2				5
Zelkova	3	16	4	9		8	16	11
Hamamelis						1	3	
Prunus					1			
Acer	1	2				1		
Aesculus		3			7	1	2	3
Parthenocissus					1			
Tilia								1
Elaeagnus	1							
Fraxinus		1	1	1		1	4	1
Viburnum						1		
cf. *ribes*	1							
AP–2	55	194	54	132	98	193	217	137
AP	250	294	279	202	121	285	281	174
Moraceae	2	15		2		30	21	3
Fagopyrum	3	1		3		1		
Polygonum sect. Persicaria	2	1		3	1	2	6	2
Polygonum except Persicaria	27	1	12		1			
Caryophyllaceae	1	3	6	9	1		1	
Chenopodiaceae	7	5	5	5	8	1	2	
cf. Amaranthaceae								1
Thalictrum	1			2			1	1
Ranunculaceae except *Thalictrum*		3					2	
Cruciferae	1	1	1	1	1	1		
Rosaceae	1					1		

花粉、胞子化石名 ＼ トレンチ番号及び層位（試料名）	第3トレンチ 第Ⅰ層	第3トレンチ 第Ⅳ層	第6トレンチ 第Ⅰ層	第6トレンチ 第Ⅱ層	第6トレンチ 第Ⅲ層	第6トレンチ 第Ⅳ層	第6トレンチ（地表より−132cm）第Ⅴ層	第6トレンチ（地表より−182cm）第Ⅴ層
Vicia								1
Leguminosae except *Vicia*			1		1			1
Impatiens				1				
Actinostemma							3	
Rotala		2			1			
Trapa							1	
Haloragis				1				
Myriophyllum							3	
Umbelliferae	1	4		3	1	1		1
Nymphoides								1
Labiatae				1				
Plantago			1	1		1		
Campanula			1		1			
Artemisia	15	37	10	69	31	28	20	22
Carduoideae	2	6	1		4	2	1	2
Cichorioideae	7	2	5	3	93			2
Alisma		3		4		1		
Sagittaria	1	12		15	1	26	16	1
Blyxa						1		
Monochoria		3		1		6	3	2
Iridaceae					1	2	1	
Aneilema				1		2	4	
Eriocaulon						1		
Gramineae	647	334	533	675	65	324	229	56
Sparganium					1	1	21	
Typha		1					7	1
Cyperaceae	24	110	16	124	9	97	53	36
cf. Gentianaceae					1		1	
NAP	740	544	592	924	220	529	396	133
Trizonocolpate pollen		2		1	1	1	2	2
Trizonocolporate pollen	7		4	9	17	4	7	9
Inaperturate pollen							3	
FP	7	2	4	10	18	5	12	11
Lycopodium							1	
Ophioglossum							1	4
Osmunda	1						1	2
Polypodiaceae							3	7
Salvinia natans	3	1	3			1	15	7
Monolete spore	8	6	6	11	1	4	11	128
Trilete spore	2	7	3			1	3	4
FS	14	14	12	11	1	6	35	152
Sphagnum								2
MS	0	0	0	0	0	0	0	2
Total Number	1,011	854	887	1,147	360	825	724	472
Pediastrum						1		
Botryococcus	60		50	13	20			
AP–1 (%)	19.3	11.7	25.4	6.1	6.1	11.2	8.8	7.8
AP–2 (%)	5.4	22.7	6.1	11.5	27.5	23.4	30.0	29.0
NAP (%)	73.2	68.3	66.6	80.5	61.1	64.1	54.7	28.2
FP (%)	0.7	0.2	0.5	0.9	5.0	0.6	1.7	2.3
FS (%)	1.4	1.6	1.4	1.0	0.3	0.7	4.8	32.3
MS (%)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4



図Ⅱ　長野市石川条里的遺構試料主要花粉・胞子化石ダイアグラム

流域からの河川の運搬・堆積の３つの解釈をあげた。今回の試料（石川条里的遺構）においてもⅤ層～Ⅱ層においてコナラ亜属等の広葉樹花粉が多い。この両地点の間は約15kmほど離れており、今回の試料が粘土質（Ⅴ、Ⅳ、Ⅱ層）であることから長野盆地の樹木組成としてⅤ、Ⅳ、Ⅲ層においてナラ類（おそらくミズナラ）、ブナ、ケヤキ、等の広葉樹が多く生育していた可能性が大きい。両地点におけるコナラ亜属を多く産出する花粉構成は野尻湖の立が鼻湖底堆積物の完新統のＪ列層にみられる（野尻湖花粉グループ、1980）。このＪ列層は遺物の産出により、縄文時代から歴史時代とされ仲町での相当層最上部では弥生時代の遺物を含むが、とりわけ平安時代以降の遺物が多いとされている（野尻湖人類考古グループ1980）。今回のⅣ層が平安時代埋没水田と考えられていることから、同じような構成を示すⅤ層からⅢ層までＪ列層の最上部に相当するものと考えられる。従って、前回の川田条里的遺構のⅤ層からⅢ層までについても同じことが云えよう。

次に、今回の目的である　①現水田層と埋没水田層の比較、②埋没水田層の更に下層に水田面が存在する可能性について述べる。

今回分析した試料のうちイネ科が顕著に多産した第３トレンチ第Ⅰ層、第Ⅳ層、第６トレンチ第Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ層（132cm）について、ノマルスキー微分干渉装置を使用し、栽培型（Cultivated type Ⅰ．おそらく麦類　Oryza type Ⅱ．イネ型）と野生型（Wild）の割合を図Ⅲに示した。図Ⅲによると第３、第６トレンチの第Ⅰ層ではイネ型が70％以上を占め野生型が10％前後であった。埋没水田層とされる第Ⅳ層においても第３トレンチでイネ型約57％、野生型43％、第６トレンチでイネ型約78％、野生型22％である。第Ⅳ層はⅠ層と比較するとイネ型の割合が少なくなっているが全イネ科の半分以上を占めること、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモ、等の水田雑草の花粉・胞子を伴なっていることから水田稲作が行なわれていたものと云えよう。

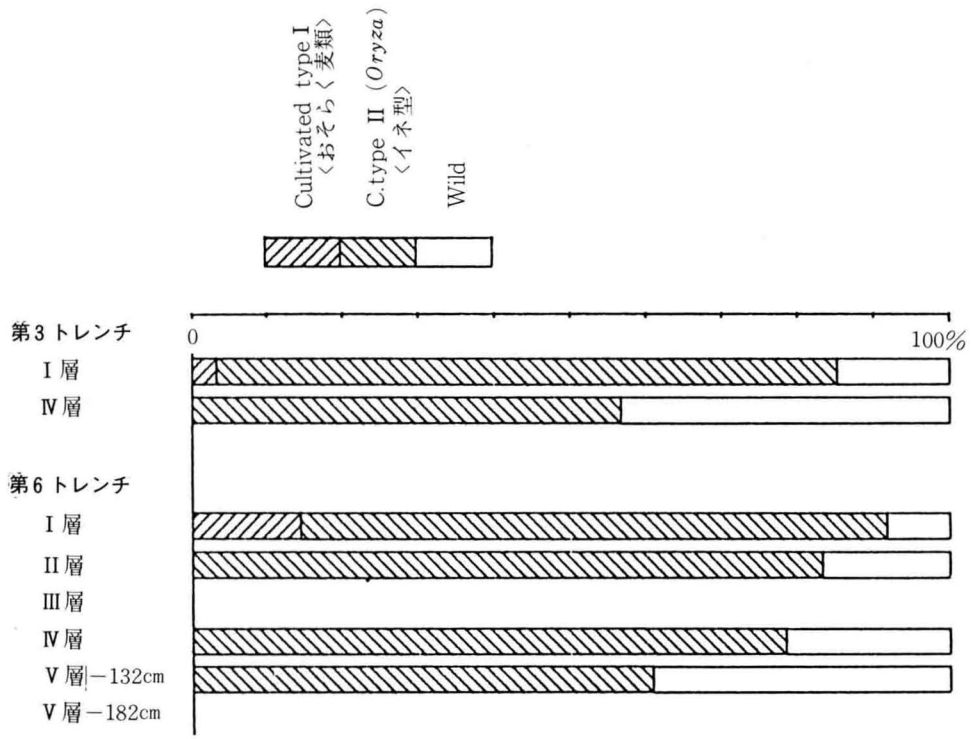
次に埋没水田層以深については、第６トレンチの第Ⅴ層132cmでイネ型が約61％、野生型が39％であり第Ⅳ層と余り変らない結果が得られている。また水田雑草も多く産出することから第Ⅴ層132cmにおいても水田稲作が行なわれていた可能性が高いと云えよう。なお、図ⅢにおけるCultivated type Ⅰはおそらく麦類と考えられる。また今回のイネの同定はノマルスキー微分干渉装置（光学顕微鏡）を使用したものである。

まとめ

○前回分析を行なった川田条里的遺構と今回の石川条里的遺構と非常によく似た結果が得られた。

○そして長野盆地において第Ⅴ層から第Ⅲ層までナラ類（おそらくミズナラ）、ブナ、ケヤキ等広葉樹が多く生育していたものと考えられた。

○その結果第Ⅴ層から第Ⅲ層までは野尻湖の立が鼻湖底堆積物の完新統のＪ列層最上部に相当するものと考えられた。



図III　イネ科花粉中に占める栽培花粉（I・II）と野生型花粉の割合

○第I層（現在の水田層）と第IV層（埋没水田層？）と比較した結果第IV層においてもイネ科中のイネ型の割合が多く、水田雑草とされる花粉も出現することから水田稲作が行なわれていたものと考えられる。

○さらに第V層132cmにおいてもイネ科中のイネ型の割合が多く、水田雑草とされる花粉が出現することから水田稲作が行なわれていた可能性は高い。

文　　献

野尻湖花粉グループ（1980）野尻湖層の花粉化石と植物遺体　地質学論集　19　p101−130

野尻湖人類考古グループ（1980）野尻湖周辺の人類遺跡　地質学論集　19　p215−249

塚田松雄（1981）過去一万二千年間—日本の植生変遷史II．新しい花粉帯　日生態会誌．30　p201−215

長野市川田条里的遺構　1982年に長野市教育委員会殿より依頼分析し提出

第3節　考　察

1　埋没水田地割の復原

調査対象地は、現水田面に条里的地割とその痕跡が認められない地域であったが、先年の第1次調査において、条里的地割に基づくと推定される畦畔様遺構が確認され、埋没した条里的水田遺構が存在する可能性が指摘された。今回の2次調査においては、遺構の平面的検出と花粉分析により、それらの遺構をほぼ水田畦畔として断定できる結果を得ることができたと言えよう。また、畦畔は例外なく磁北を基準とした南北・東西方向に設定されている可能性が考えられ、表2の測定値から畦畔が規則的地割に基づいていることも推定され、本水田遺構が条里的地割による可能性はますます高くなってこよう。次に、第1次調査結果を含め、得られた結果を総合した本遺構地割の復原を試みる。

2次にわたり掘削した試掘坑と確認された畦畔位置は、第17図にあらわしたとおりである。畦畔の間隔は、前節表2でみるとおり、条里地割における1町（約109m）を10等分した場合の6歩（約10.9m）またはその倍数に近似することが明らかであり、第1次調査での第2トレンチでもほぼこの値をもった畦畔間隔が存在している（14－15号畦畔10.4m、15－16号畦畔11.7m、16－17号畦畔11.6m）。これら畦畔間隔の測定値平均を求めると公約数が10.7mとなり、6歩が水田区画の最小単位であることが推定できる。第17図中赤線方眼は6歩目の方眼を磁北方向を基準として設定したものであり、第1トレンチを例外とし、各トレンチの畦畔位置がほぼこれに合致していることがわかる。調査地東端に位置する第3トレンチの20号畦畔から西端の第4トレンチ27号畦畔までは、南北方向の畦畔が23本存在することが図上で推定され、このうち$\frac{2}{3}$以上の16本が調査で確認でき、いずれも想定位置と大差なく位置し6歩×22区画（239.8m）に近似する結果となっている。これに対して、東西方向の畦畔は、北端の第3トレンチ18号畦畔から南端の第6トレンチ30号畦畔まで、6歩×19区画（207.1m）に相当し、このうちわずか6本が調査において確認された。各畦畔の間隔は6歩単位によると、18－21号畦畔3区画、21－23号畦畔2区画、23－38号畦畔9区画、38－25号畦畔3区画、25－30号畦畔2区画となっており、6歩等間隔の区画は存在し難い。このことより、本遺構における地割が、1町の東西を10等分し6歩を1段巾とする「長地型」を基本形としたものであることが容易に推察できよう。

次に各畦畔の規模について述べる。第1次調査では、畦畔の規模を幅員と高さにより3種に分類した。

大畦畔　幅5m、高さ50cm以上のもの（旧畦畔a、現1号畦畔）

中畦畔　幅2m、高さ40cm以上のもの（旧畦畔c、現3号畦畔）

小畦畔　幅1m、高さ30cm以下のもの

今回の調査結果をそこにあてはめると、21号畦畔のみを中畦畔として把握する他、いずれも

第17図　石川条里的遺構埋没畦畔位置図(1：2,000)
注）方眼は磁北方向6歩(10.9m)目

小畦畔に包括されるものである。６町四方の条里を画すると考えた大畦畔第１トレンチ１号畦畔の連続は、今回第４トレンチ～第６トレンチ内において検出されるものと予想していたが、想定位置における24・34号畦畔はいずれも幅が100cm以下の小畦畔であった。また、１町四方の坪を画すると考えた中畦畔は、第１トレンチ３号畦畔と第３トレンチ21号畦畔とでは図上で南北に20ｍのずれを生じており、仮に21号畦畔を基準としても１町へだてた第７トレンチ内においては同様の東西方向畦畔を確認することができず、現在までの成果によって条里区画及び坪区画を復原することは困難となってしまった。

以上より、本遺構の水田地割が磁北を基準とした南北東西方向により、１坪を東西10等分した「長地型」が基本となっている点については断定し得る段階に達したといえる。しかし地割の基準線ともいえる条里区画及び坪区画については、未だ復原に必要な資料を得られないのが現状である。また、坪を画する畦畔に沿って存在することが予想される水路に関しても、遺構として確認するには及んでおらず、坪区画の確定とともに今後の調査での課題とされる。

なお、埋没する条里的水田地割と現存する条里的景観との比較は第１次調査報告において試みているが、ほぼ磁北を基準としている点では両者の一致をみることが明らかであり、現存する条里的景観の形成・遺存の過程に、埋没する条里的地割がどのように関与しているのかという点についても、今後の調査の進行に応じて解明されるべき問題である。

２　埋没水田の年代

長野盆地の南縁における条里的遺構の考古学的調査は、昭和36年～39年にかけて実施された更埴市屋代田圃が初源であり、その後同所生仁遺跡・馬口遺跡から大溝が報告されているが、条里的遺構の検出を目ざしたのは昨年の本遺跡と長野市川田での調査までない。それも全貌を露呈したのでなく、この種の研究はこれからといったところが実状である。

今回の調査で確認できた畦畔遺跡は、現地表下３層目で検出され、現在の水田に次ぐ古さである。この畦畔の埋没時期をさぐる上で、重要な資料を得た。それは第５トレンチ28号畦畔直下の水田底面にほぼ接する状態で10枚重ねの須恵器坏が検出され、また近くより内面黒色処理された土師器片口坏、皿形の灰釉陶器片が出土したことにある。ただ正確な年代を設定するには、他器種の様相がほしいところであるが、あえて推定してみたい。須恵器坏は、口径・底形・器高などほぼ近い数値を示し、整形も同一であるので同時製作の可能性がある。器形では、体部が椀形を呈し、底径がそれ程小さくなっていないものの器高が減じている。整形が粗雑であり、焼成もそれ程良くない。これらの点を考え合せれば、当地域における須恵器生産の消滅期に近い時期のものであることをうかがわせ、灰釉皿形陶器の伴出は、善光寺平第５様式Ⅲ期頃からと推論されている。即ち11世紀前後の時間帯を与えることができる。

さてこの埋没水田がいつ構築されたかという点に関しては、決定的な資料を持たない。更埴市屋代田圃での原初条里は「少なくとも大化改新ないし、班田制に関連して説かれている古代条里地割でなく」「原初条里構築の年代は、10世紀頃としてほぼ間違いないところであろう。」と

されている。この屋代田圃と本調査地は、千曲川をはさんで対峙する位置にあり、地理的・歴史的にも深いかかわりのあった地域と考えられており、花粉分析の結果でも、今回検出した埋没水田の下に更に１ないし２枚の水田面があることが判明している点などを考慮すれば、Ⅴ層（現地表下132ｍ）が原初条里と考えられる。そうすれば、10世紀代のいつの時期か原初条里は埋没し、その後構築されたことになる。

埋没の原因は、覆土などから洪水によるものと考えられるが、何年のどんな洪水によったものか記録にない。（矢　口）

参考（引用）文献

長野県教育委員会編　『更埴市条里遺構の研究』　昭和43年
更級埴科地方誌刊行会　『更級埴科地方誌第２巻』　昭和53年
長野市教育委員会　『浅川扇状地遺跡群・川田条里・石川条里』　昭和58年
更埴市教育委員会　『生仁』　昭和45年
更埴市教育委員会　『屋代馬口Ｋ』　昭和53年
長野県史刊行会　『長野県史考古資料編』　昭和56年

第３章　上駒沢遺跡

第１節　遺跡周辺の環境

１　地理的環境

飯縄山を水源とする浅川は、浅川東条地籍の通称浅河原口を扇頂として主軸を東南東へ向け、南は約３キロ、東方へは約４キロ地点の長野電鉄朝陽駅から上駒沢を結ぶ線に到達する扇状地を形成している。

この扇状地の北辺を限って駒沢川が浅川と並流する。この駒沢川が押田を谷口としてそれ以北の山地を浸食し、その土砂は浅川と複合扇状地を形成して上駒沢附近に達している。

本遺跡は、その駒沢川扇状地の東端にあり、西半分地籍は約$\frac{1}{30}$の斜度をもつ東下り緩傾斜で、それ以東は$\frac{1}{100}$傾斜の低湿な平坦地となって浅川に及ぶ扇状地端末地形を形成している。

駒沢川は、皐月高校附近から山麓をぬって人工的に東北流しているが、以前には本遺跡北側附近を貫流していたことが地ぼう(貌)からうかがえる。そして現在では、新田川が本調査地区の西南隅から開析を始めて東北流し、東半地籍では天井川となって北限を東流している。このような扇端湧水地域にある本調査地籍は水田耕作が中心で、一部に果樹園の経営が見られる。

ここから北約1キロには第四紀洪積世の豊野層からなる標高411.3メートルの若槻台高地があり、田子・土京両川が合流して刻んだ下田子凹地をへだてて東北の長峯丘陵に続く。これらの台地東南側は西南から東北に走る活断層によって比高差約50メートルの急斜面を形成する。

この地形が標高923.0メートルの三登山と共に、北から吹きつける冬期季節風の自然的障壁となって山麓から扇状地端末地域一帯に絶好の居住適地を構成している。

この自然的環境を活かして、三才・上駒沢をはじめ下徳間・旧稲積村などの集落が古くから発達し、近年は駒沢新町を中心として新興住宅地域となり、高専などの学校も設立されている。

延喜宮道を始めとする古来からの交通路がこの地域をぬい、国鉄信越本線も旧北国街道ぞいに敷設されて本遺跡の西端を限っている。　（和　田）

２　考古学的環境

調査地周辺の地形は複雑な様相を呈しており、その中で個性ある遺跡が散在している。第18図遺跡分布中、縄文時代中期の田子沖遺跡・三才前方後円墳を除き、他は過去において調査された地点である。これらの遺跡は、駒沢川や浅川によって形成された扇状地上や、千曲川の自然堤防上に位置したりして、その範囲を明確に把握することができない。また単純遺跡の様相を呈していても、包含層に他の時期のものが含まれていたり、隣接する地点からも同様な遺構

第18図　上駒沢遺跡周辺の地形（１：20,000）

1　田子沖遺跡
2　三才前方後円墳
3　三才田子遺跡
4　駒沢祭祀遺跡
5　駒沢新町遺跡
6　古屋敷遺跡
7　徳間（柳田）遺跡
8　水内坐一元神社（柳原小学校）遺跡
9　調査地

が確認され、複合遺跡となっているものが多い。

遺跡を個別にみると、若槻丘陵から北にかけての台地上には、縄文時代の遺跡が多くなり、その中でも田子沖遺跡が著名である。弥生時代では、三才田子遺跡から中期の住居址が、また徳間(柳田)遺跡からも同期の住居址2軒が検出され、住居形態の変遷を知る上で重要な資料となっている。この他後期初頭に比定される吉田期の住居址、後半の箱清水期の住居址を含む遺構が調査された水内坐一元神社(柳原小学校)遺跡がある。この遺跡は小島・十二(柳原)遺跡群に含まれており、遺構の重複関係がみられ、当地域においては最大の集落址と考えられている。

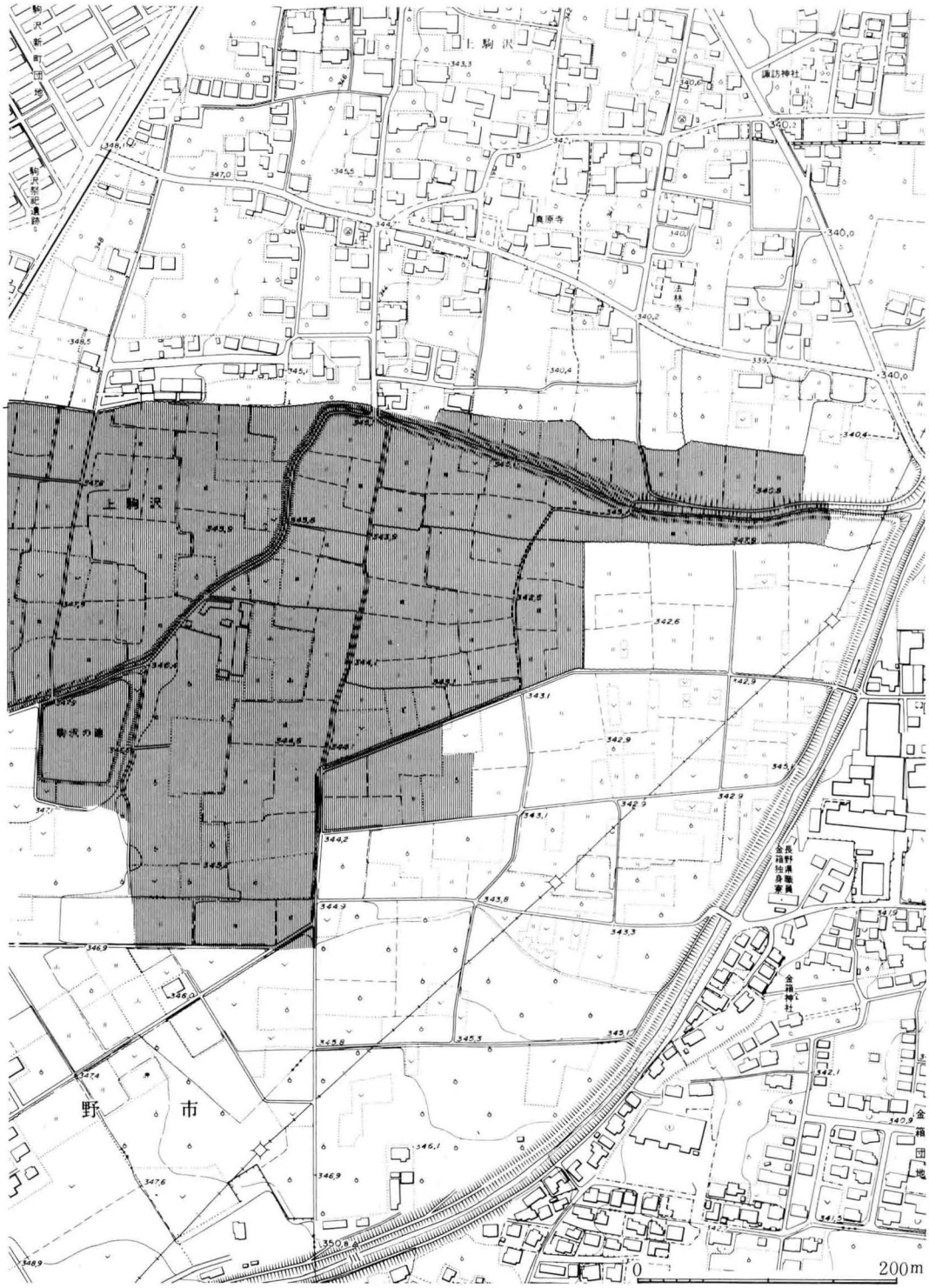
古墳時代を象徴する高塚は、三才前方後円墳をあげることができる。この古墳は、当地において盟主的な古墳で、全長47m・後円部径28m・同高4.5m・前方部幅20.0m・同高3.0mをはかる。主体部は竪穴石室と思われるが、盗掘を受け、遺物は不明である。この古墳の西方の山頂には径20m程の円墳が1基存在するほか、若槻丘陵南斜面に4基からなる徳間古墳群がある。該期の集落遺跡は、中・後期に属する水内坐一元神社遺跡・古屋敷遺跡などがある。古屋敷遺跡の第4号住居址は一辺10m近い大形のもので、当地における権力者又は司祭者の存在を思わせるものとして注目される。駒沢祭祀遺跡は古墳時代前期から後期にかけて様々な祭祀が行なわれた場所であり、日本でも平坦地における代表的な遺跡である。遺構は7ヶ所確認されており、そのうち礫積遺構から多量の湧水がみられ、これを基点として扇状に他の遺構が分布している。遺物の出土量も多く、中でも第1号特殊遺構からは、「長径6m、短径4m余、ほぼ長方形に掘り下げた土壙に甕・壺・坩・小形丸底土器・手捏土器、小量の鉄器(鉄鏃・刀子など)と多量の鉄片、小量の滑石模造品(勾玉・管玉・剣形模造品・有孔円板)と800点余に及ぶ滑石製臼玉と小量のガラス玉」(上水内郡誌歴史編)の出土をみている。この遺跡は浅川・駒沢川扇状地の端部に位置し、湧水地点であることを加味して農耕儀礼上の祭祀跡と推定されている。

奈良・平安時代になると、遺跡数も増大している。徳間小学校々庭からは数軒の住居址の存在が確認されているし、本調査が実施された駒沢新町遺跡からは、狭い調査範囲に10軒の住居址が密集していた。この遺跡からハート形をした特殊遺構内から焼土を伴った懸仏鋳型が出土したことは注目に値する。三才田子遺跡はこれらの集落遺跡と趣を異にして、数棟の掘立柱建物跡が発見されたり、高盤鉢などがまとまって出土し、円面硯の出土もみたことから考慮して、東山道越後国府にむかう多古駅跡または何らかの官衙跡と推定されている。この他に平安時代末頃と考えられる灰釉蔵骨器・合口甕棺が出土したことも特記されよう。

中世関係の遺物では、水内坐一元神社遺跡から柱穴群に伴なって青磁片が出土しており、地方豪族の居館址が想定されるが、有力な証拠は今後の調査持ちという状況にある。

発掘調査が実施された遺跡を瞥見したわけであるが、本調査をとりまく考古学的環境は、当初記したように個性的な遺跡が多く、内在している問題も多い。最小の地域空間を考える時、本調査地以東の後背湿地とのかかわりの中で解明されるものであろう。

(矢　口)



第19図　上駒沢遺跡調査対象地及び地形（１：5,000）

第２節　調査内容

１　調査経過と調査概要

調査対象地は15.6haと広大な面積であるため、今後進行する圃場整備事業への対応も含めて、対象地内における遺物包含層の有無及び遺構の分布状況を把握することを主眼とし、試掘坑を任意の地点に設定することとした。試掘及び記録作業は昭和58年12月２日から４日に実施し、試掘坑４本を掘削するに至った。試掘坑内では地表下１ｍ付近で湧水が著しくなるため、試掘の深度は１ｍを基準とし、断面における土層の確認と遺物の包含状況を調査した。遺物の出土は第２トレンチ内に限られ、その他の試掘坑においての遺物の出土は認められなかった。第２トレンチの土層は、扇状地形上に特有の複雑な様相を呈しており、統一的な遺物包含層と遺構面を確定するには至らなかったが、柱穴状の落ち込み及び土壙状の落ち込みが散発的に存在し、１ヶ所のみは土壙が平面的に検出された。この他の試掘坑内には遺物包含層は認められず、調査地東端の第４トレンチでは、地表耕作土直下よりグライ層が発達した強グライ土壌が観察され、調査対象地で標高344ｍ付近を境として、下面は低湿地に含まれ、集落址としての可能性が上面に求められることとなった。圃場整備予定地内での58年度施工は、この低湿地内の一部にあたるため、施工に伴う追加調査の必要性が認められないとの判断に基づき、今回の試掘調査を終了とした。

２　試掘坑（第20図・21図）

第１トレンチ

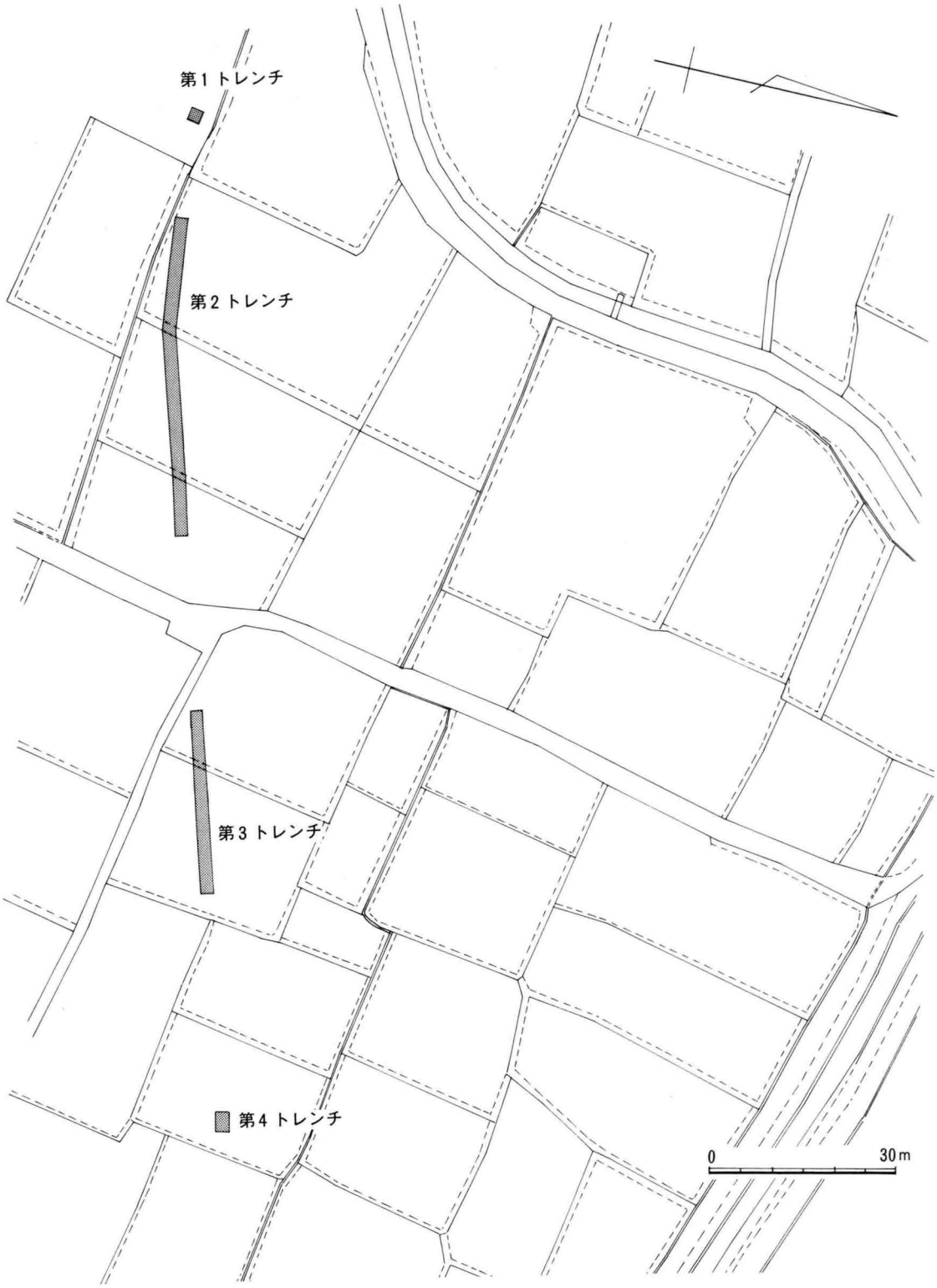
標高345ｍ地点に長さ２ｍをもって設定した。耕作土下に黒色土が存在し、下部に至るほど砂礫質となっている。地表下80cmにて砂礫多含の黄褐色土に至っている。遺物の出土はない。

第２トレンチ（第21図）

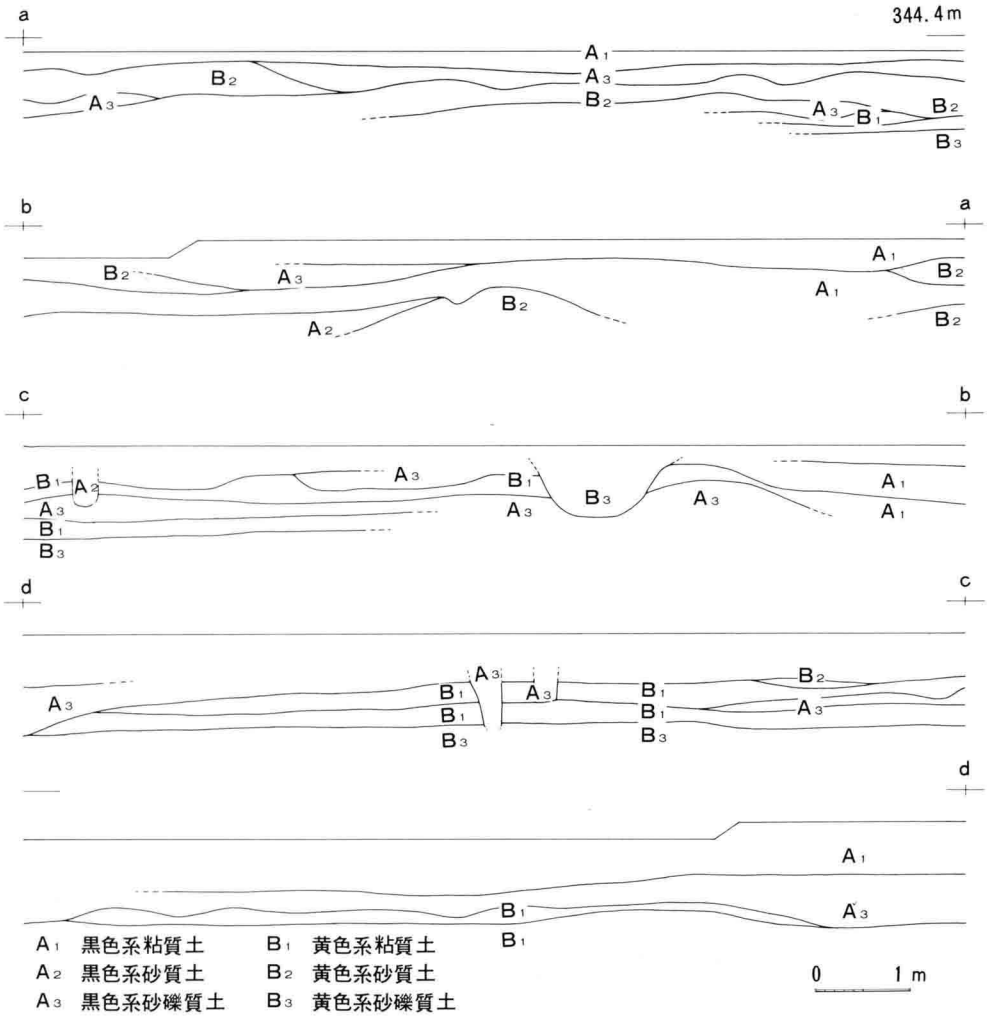
標高344.4ｍから343.9ｍ地点に長さ50ｍにわたり設定した。土層序は複雑な様相を呈し、黒色系と黄褐色系の粘質土、砂質土、砂礫質土が断続的に互層となった状況を呈する。このうち遺物包含層は黒色系土層に限られる。トレンチ西端より43ｍ地点においては最下層の黄褐色粘質土へ掘り込まれた土壙が検出された。土壙は直径90cmの円形で、検出面から15cmの深さをはかり、覆土中より小破片を含む10数点の土器片が出土した。

第３トレンチ

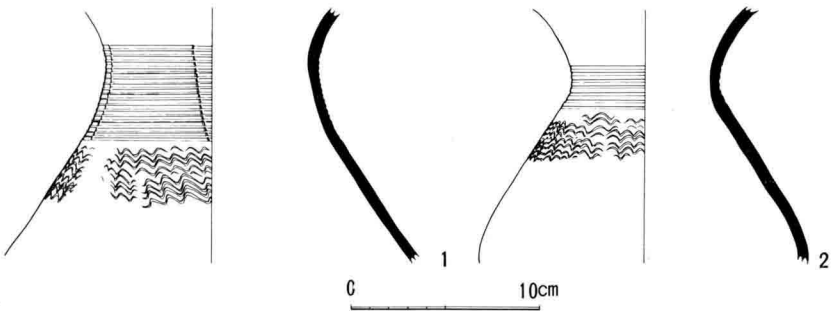
標高343.5ｍ地点に長さ29ｍにわたり設定した。耕作土下にわずかな黒色砂礫層をはさみ黄褐色砂質土に至っている。この地点より下面に向っては、排水の悪い水田面が広がり、土壌もグライ土となってゆく。



第20図　上駒沢遺跡トレンチ配図(１：1,000)



第21図　第２トレンチ内断面図（１：80）



第22図　第２トレンチ出土遺物実測図（１：４）

第4トレンチ

標高343m地点に長さ4mをもって設定した。表土から80cmの厚さをもってグライ土が続き、厚さ10cmの小礫を含むグライ土から更に下部まで粘質のグライ土が連続しており、滞水の著しい低湿地となっている。遺物の出土はない。

3　遺　物（第22図）

遺物の出土は第2トレンチのみであるが、出土量はわずかであり、総数30点に満たない。ほとんどのものは小破片であり図示できるものは壺形土器破片2点のみである。

1　頸部$\frac{1}{3}$破片であり遺物包含層より出土した。推定される頸部の直径は17cmであり大形品と思われる。櫛歯5本以上の原体により4段にわたって簾状文を施し、その下段に波状文を2段に施文している。櫛描文は右回り施文であり、簾状文は全周で6回の押し引きによるものと推定される。器面が磨耗しているため整形の不明な部分が多いが、施文帯の下はハケ整形の後ヘラミガキを加えている。

2　胴部最大径から口縁部に至る$\frac{1}{3}$破片であり、トレンチ43m地点での土壙状の落ち込みから出土した。推定される頸部の直径は7.8cmであり小形品と思われる。口縁部は端部が失われているものの外反する朝顔形を呈し、胴部最大径を中位にもつ器形が想定される。頸部には櫛歯5本の原体により横線文を2段により施文し、その下に2段の波状文を配している。櫛描文の施文は右回りである。器面が磨耗しているため整形の不明な部分が多いが、外面は施文帯を除きヘラミガキを加えている。

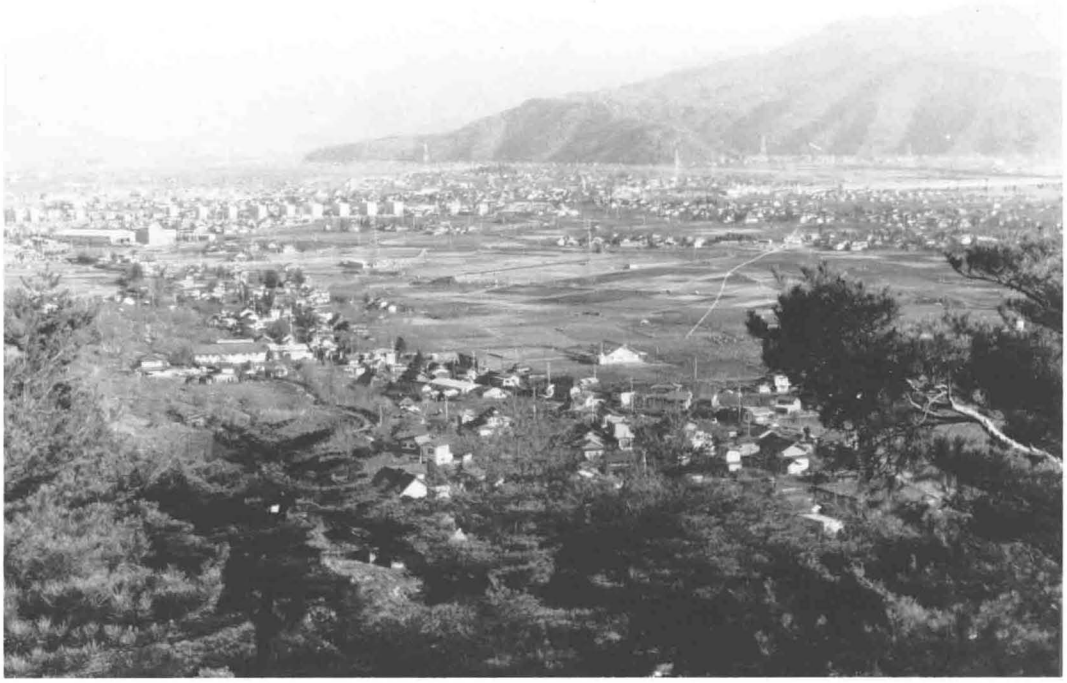
4　小　結

本調査地の立地は第1節で述べられたとおりであり、試掘坑内での土層の状況を考慮すると、調査対象地内の標高344m付近に地形の変換点が存在するらしいことがわかった。これを境として浅川に至る下面は低湿地となっており、居住域である可能性は薄く、今後の調査での対象範囲は上面へと限定されることとなる。試掘結果においては弥生時代後期の土器群を伴う遺構が散発的に存在するらしく、駒沢祭祀遺跡へと連なる傾斜地全域に同様の遺構分布を示す可能性も指摘されよう。駒沢祭祀遺跡では、扇状地端末での湧水がすでに確認されており、それよりも下面に位置する本対象地もまた端末湧水帯の連続として把握される。このような地形上における遺跡分布の様相は不明といわざるを得ず、今後の調査に期待される部分が多い。

また調査対象地内には、永正16年(1519)に柳原村に移転したと長命寺創建の地という伝承があり、廟蹟と記した石碑が残されている。この点に関しても今後の調査での対応で注意を要する部分であることを付記しておく。　（青　木）

図　　版

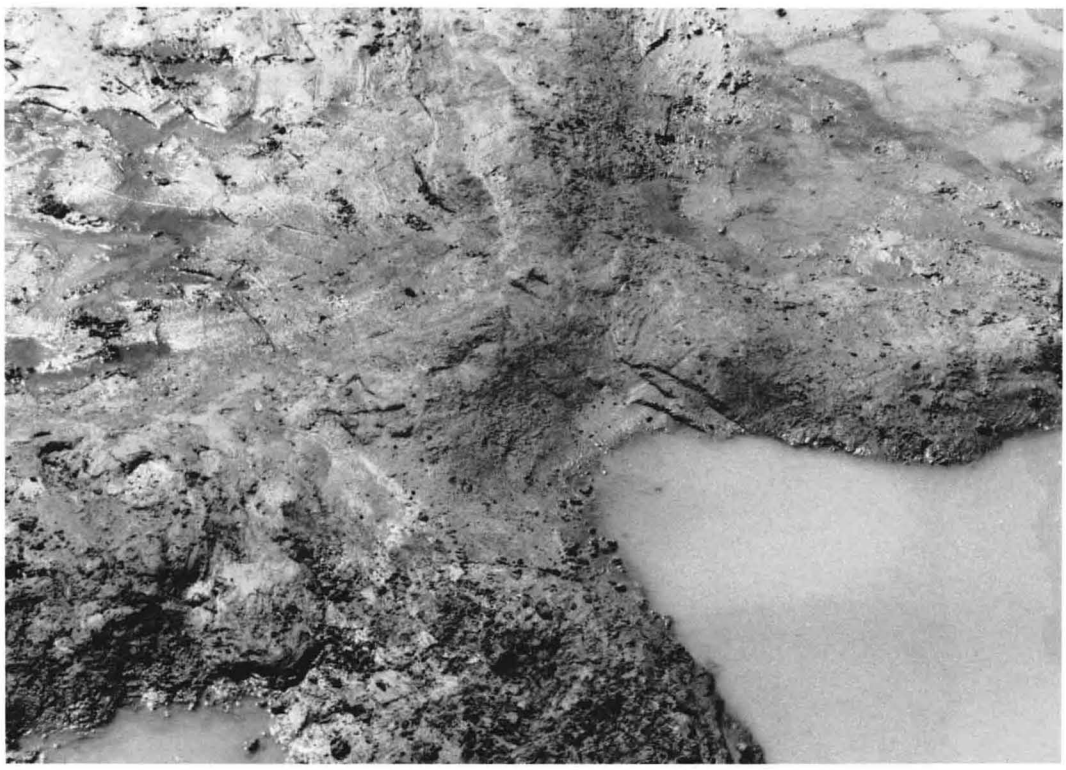
石川条里的遺構周辺の地形



石川条里的遺構遠景

石川条里的遺構近景

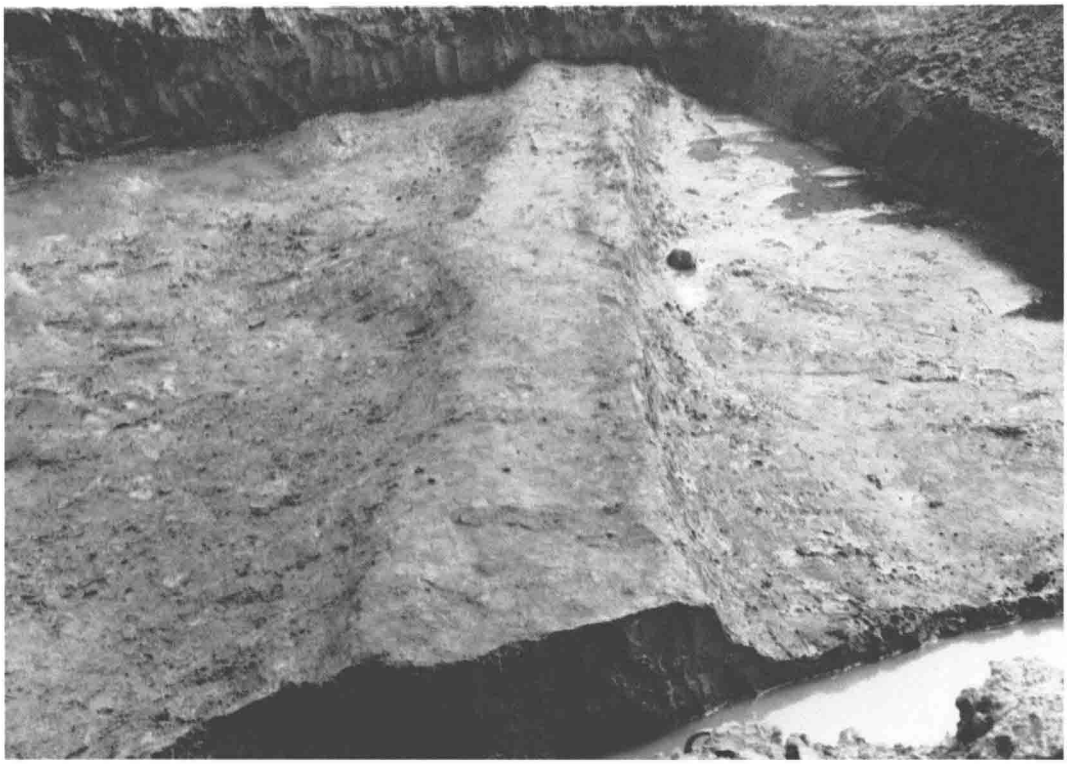
第18・19号畦畔



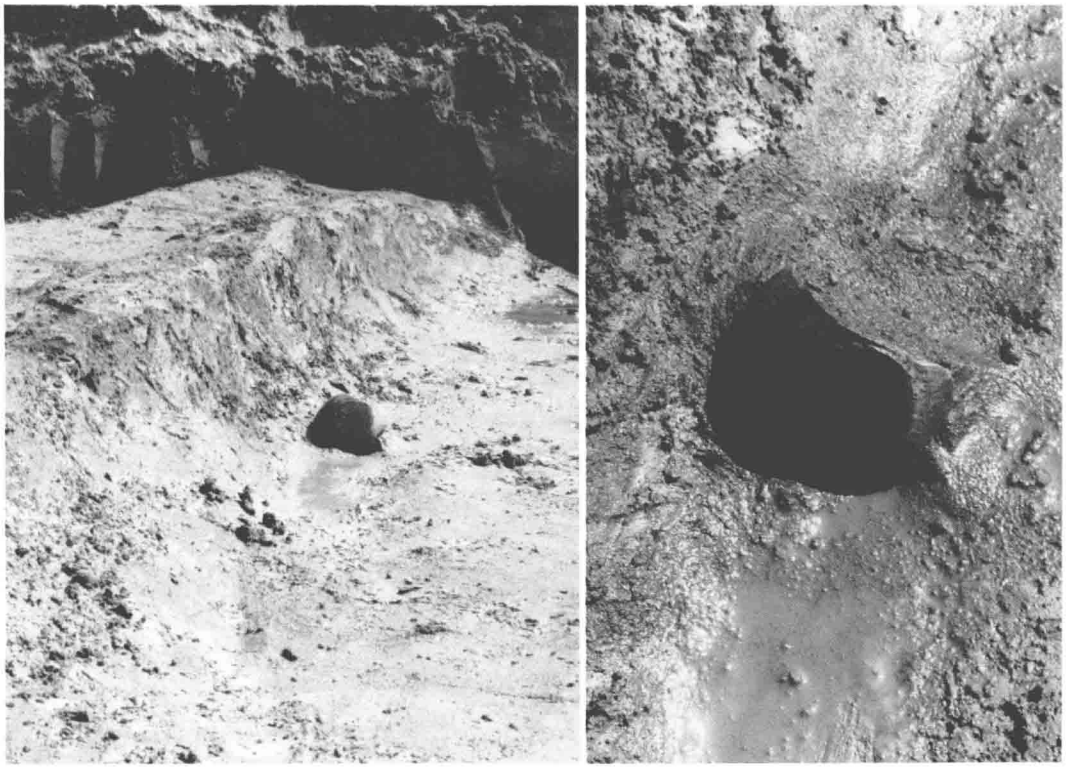
同交差部分

第20号畦畔

第21号畦畔(1)



第21号畦畔(2)



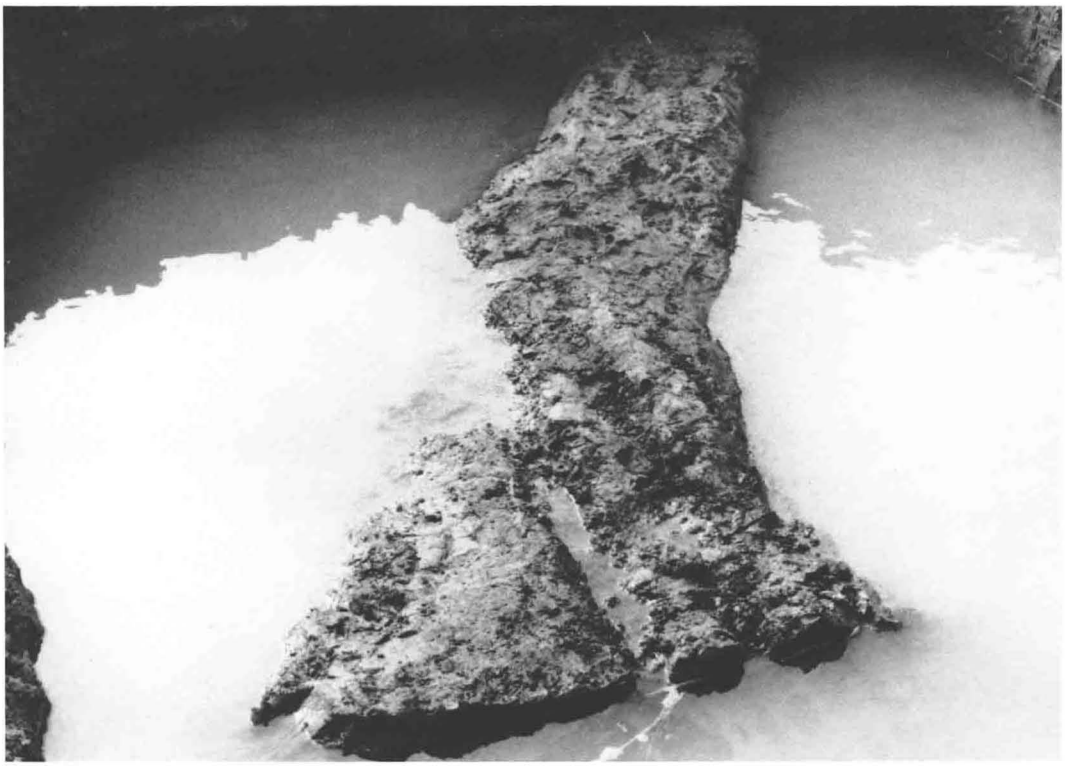
第21号畦畔遺物出土状態

第六図版

第24号畦畔

第25号畦畔

第26号畦畔



第27号畦畔

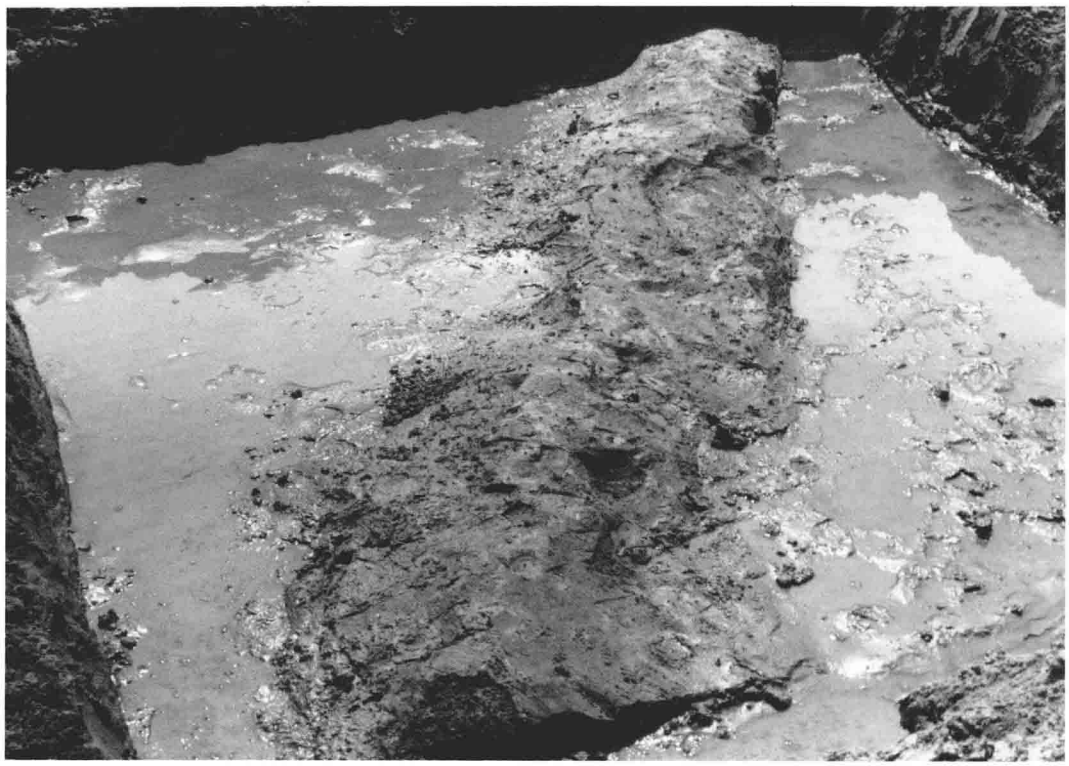
第八図版

第28号畦畔(1)

第28号畦畔(2)

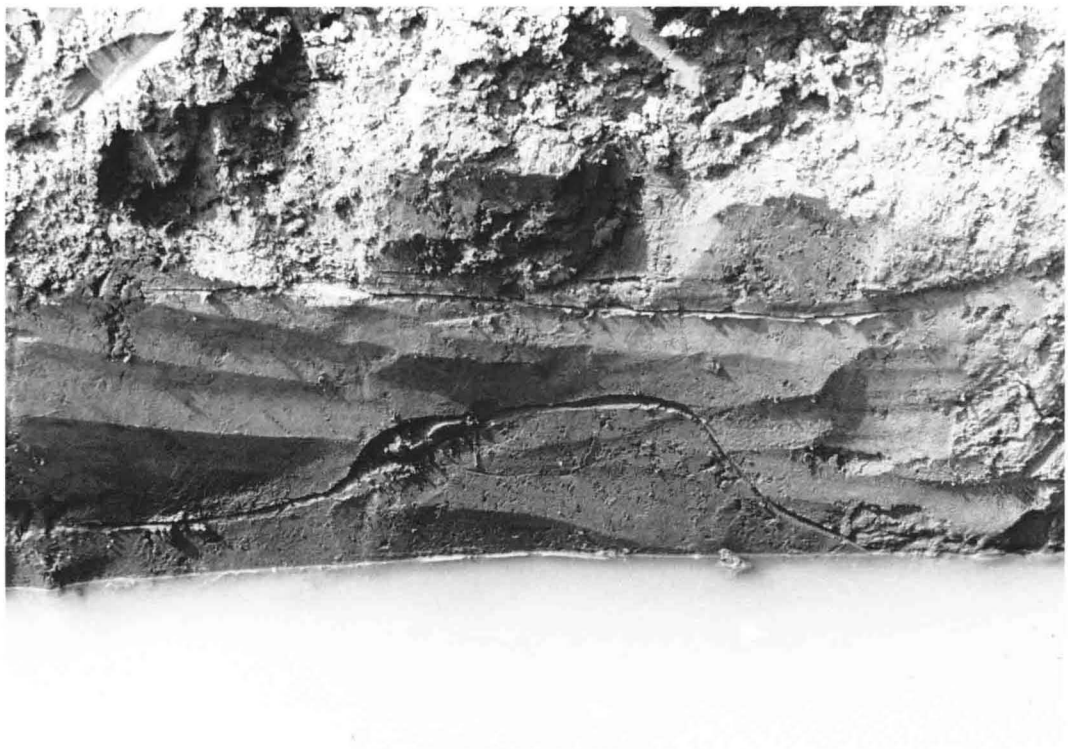
第28号畦畔遺物出土状態（1）

第28号畦畔遺物出土状態（2）



第29号畦畔

第30号畦畔



第31号畦畔

第32号畦畔

石川条里的遺構トレンチ掘削状況

畦畔検出状況

1
|
10

1

2

3

4

5

6

石川条里的遺構出土遺物(1)
(約1:2)

第十四図版

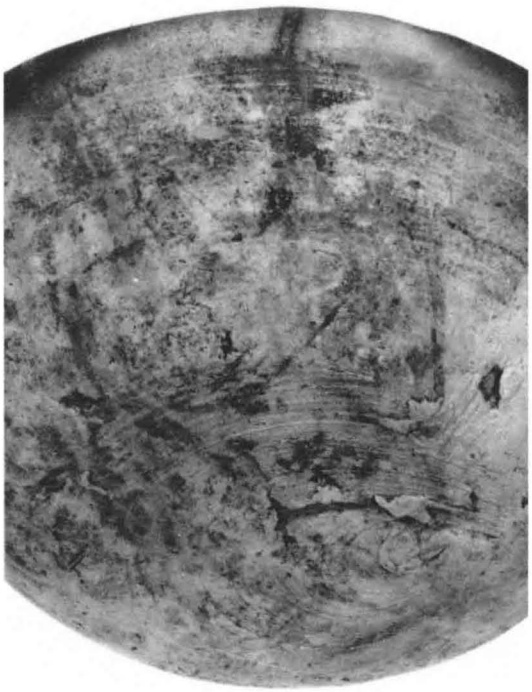
7

8

9

10

11

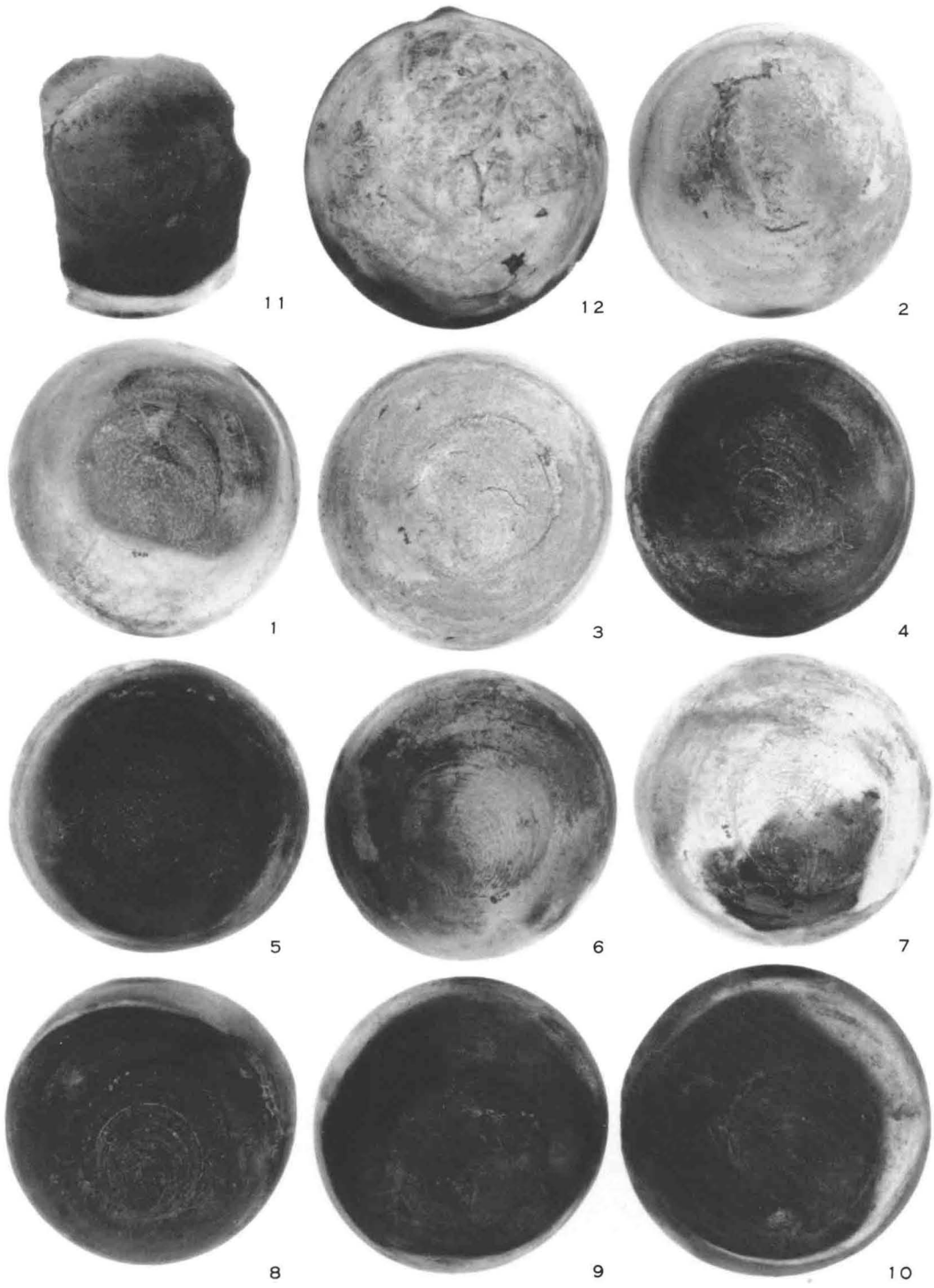


12

墨書拡大

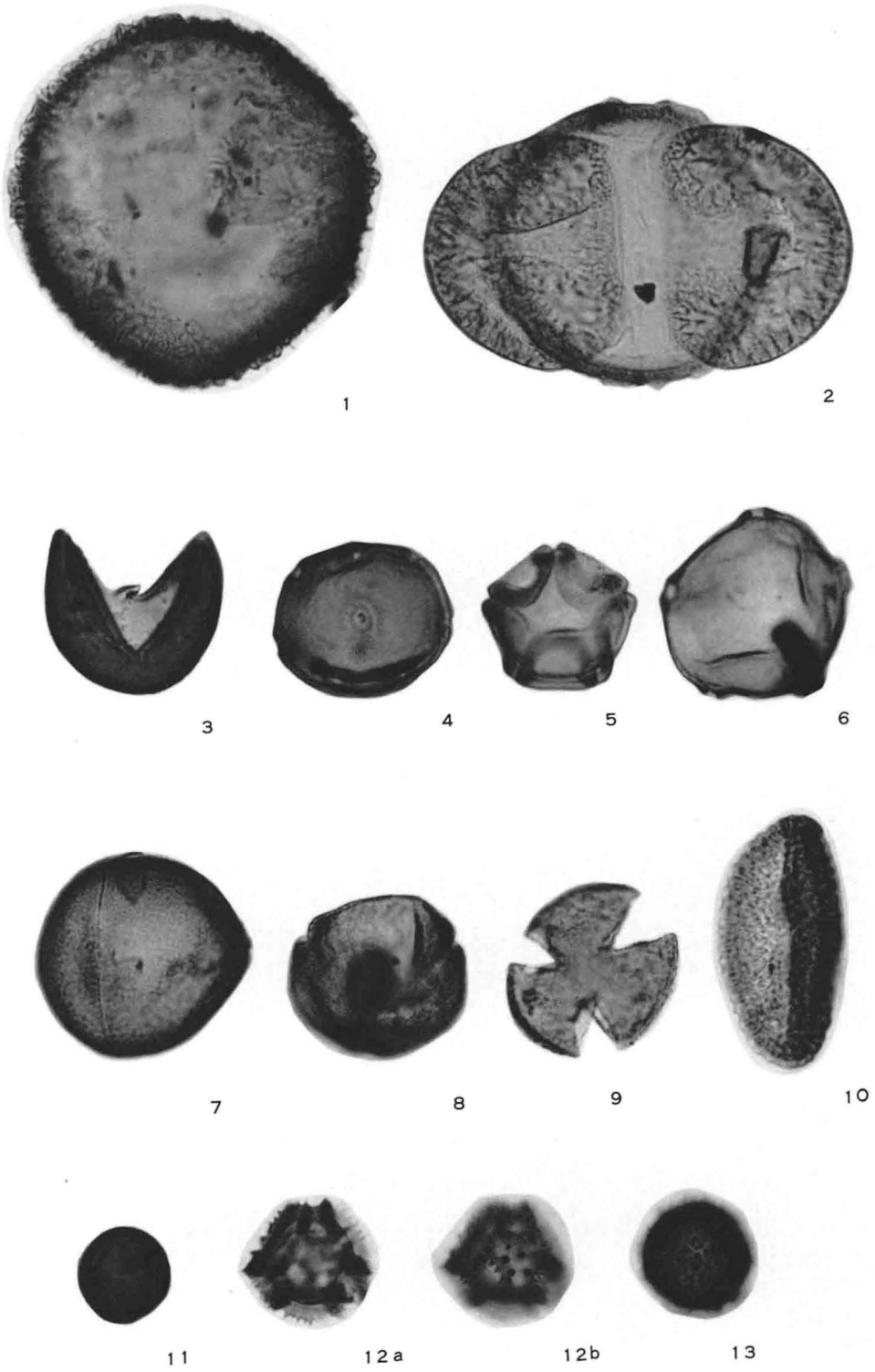
12

石川条里的遺構出土遺物(2)
(約1:2)

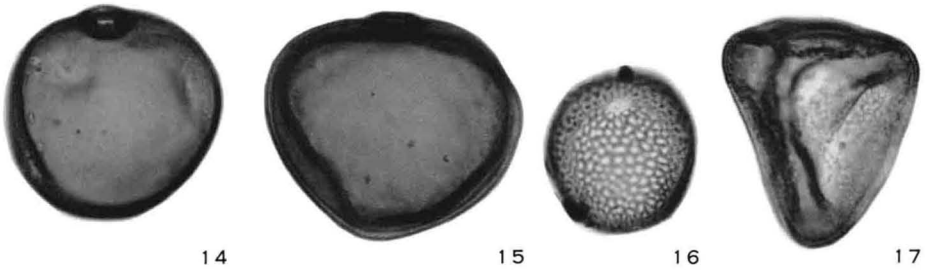


石川条里的遺構出土遺物(3)

第十六図版

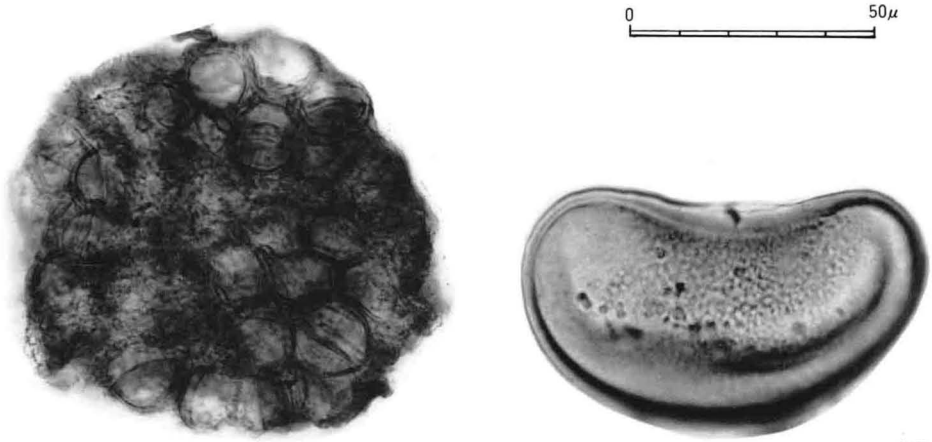


石川条里的遺構花粉胞子化石(1)



14　15　16　17

100μ(No.18)
0　50μ



18　19

写真番号	花粉・胞子化石名	トレンチ	層位
1	*Tsuga*	第3	第IV層
2	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	第6	第II層
3	*Cryptomeria*	第6	第I層
4	*Juglans*	第3	第IV層
5	*Alnus*	第6	第II層
6	*Carpinus*	第6	第IV層
7	*Fagus*	第6	第IV層
8	*Fagus*	第3	第IV層
9	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	第3	第IV層
10	*Fagopyrum*	第6	第II層
11	*Artemisia*	第3	第IV層
12a	Cichorioideae	第6	第III層
12b	Cichorioideae	第6	第III層
13	*Sagittaria*	第3	第IV層
14	Gramineae	第3	第IV層
15	Gramineae	第3	第IV層
16	*Sparganium*	第6	第V層－132cm
17	Cyperaceae	第3	第IV層
18	*Salvinia natans*	第6	第I層
19	Monolete spore	第6	第V層－182cm

石川条里的遺構花粉胞子化石(2)

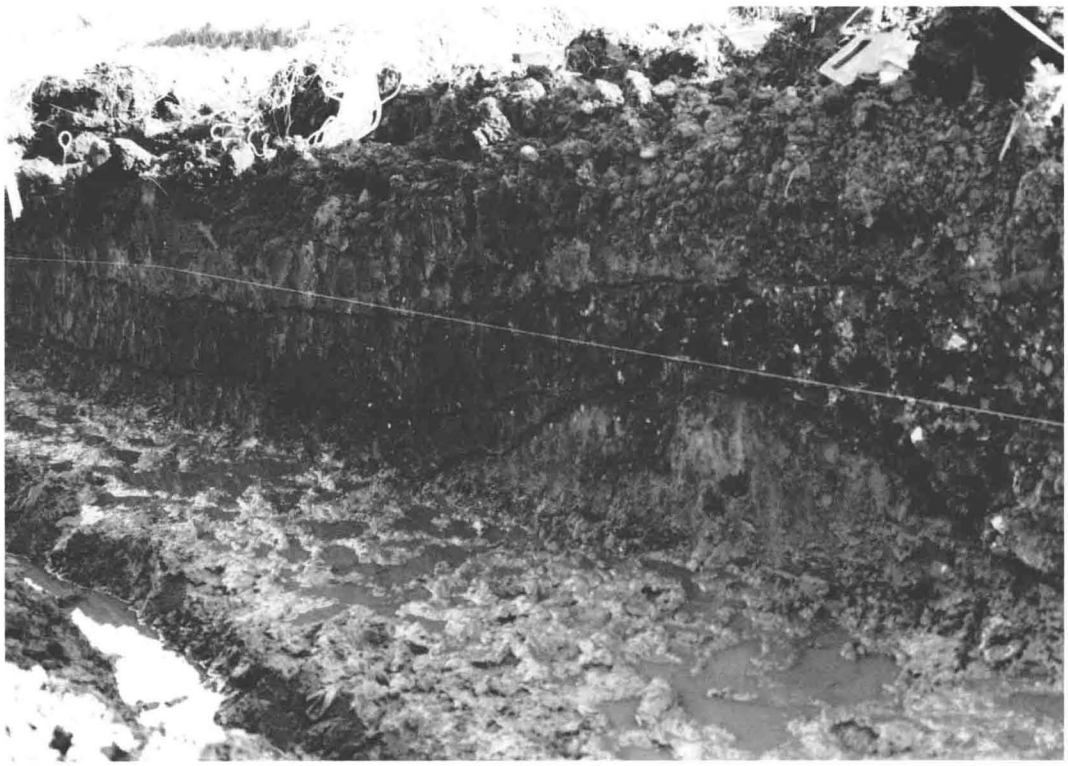
第十八図版

上駒沢遺跡近景

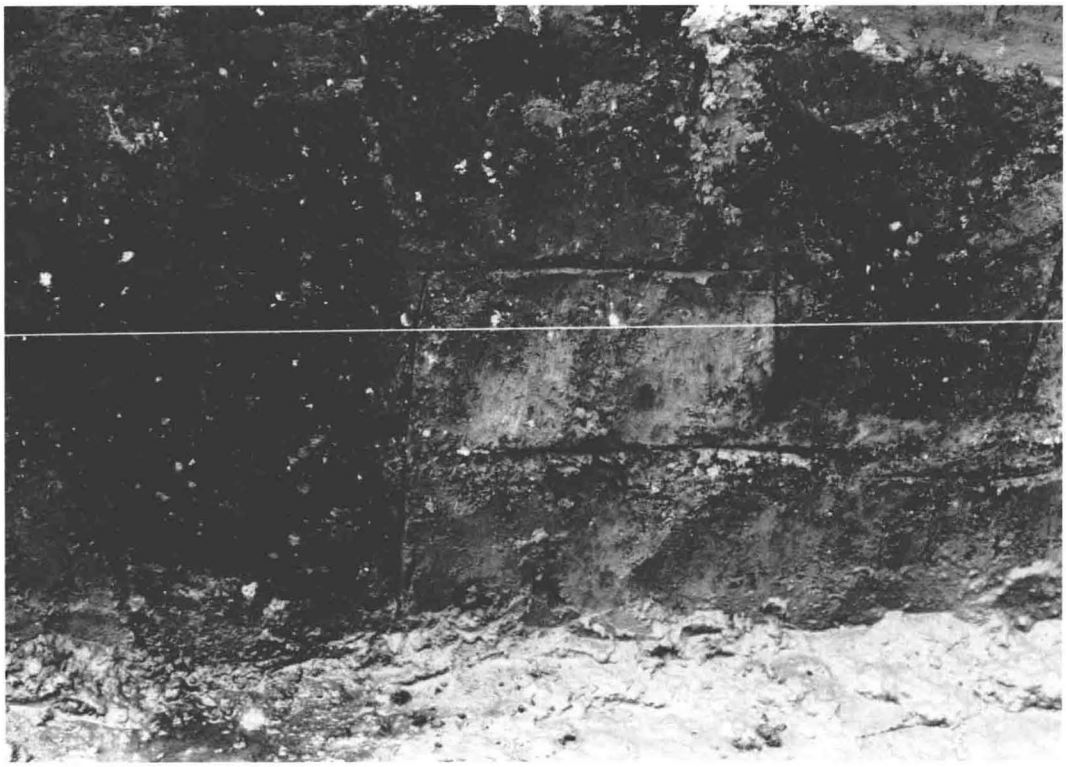
第１トレンチ土層

第２トレンチ

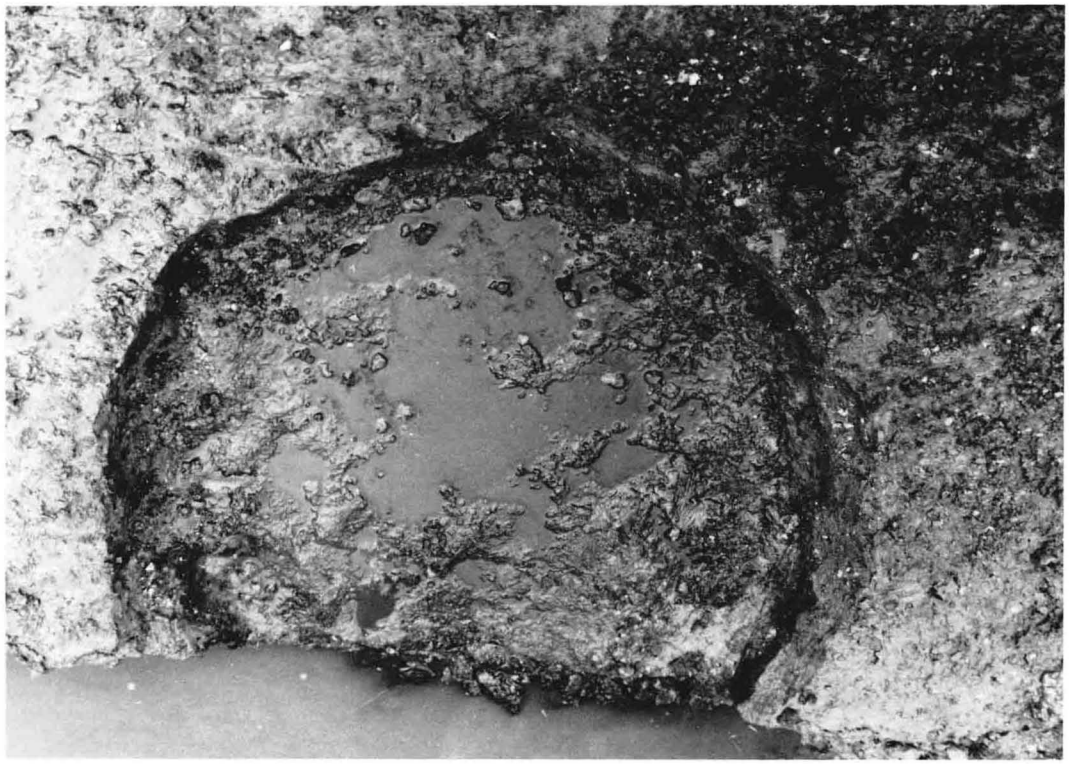
第２トレンチ土層断面(１)



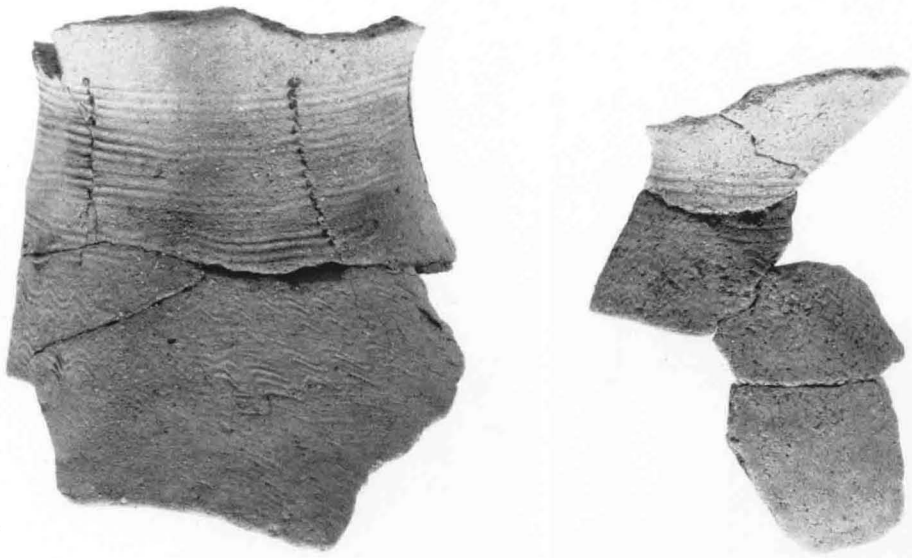
第２トレンチ土層断面(２)



第２トレンチ柱穴断面



第２トレンチ土坑



第２トレンチ出土遺物

上駒沢遺跡トレンチ掘削状況

上駒沢遺跡トレンチ調査状況

長野市の埋蔵文化財　第１集　『信濃長原古墳群』
〃　第２集　『浅川西条』
〃　第３集　『中村遺跡』
〃　第４集　『塩崎遺跡群』
〃　第５集　『塩崎遺跡群(2)』
〃　第６集　『三輪遺跡―付水内坐一元神社遺跡』
〃　第７集　『田中沖遺跡』
〃　第８集　『篠ノ井遺跡群』
〃　第９集　『四ツ屋遺跡（第１～３次）』
『徳間遺跡』
『塩崎遺跡群(3)』
〃　第10集　『湯谷古墳群』
『長礼山古墳群』
『駒沢新町遺跡』
〃　第11集　『箱清水遺跡』
『大峰遺跡』
『大清水遺跡』
〃　第12集　『浅川扇状地遺跡群
―牟礼バイパスＡ・Ｅ地点遺跡―』
〃　第13集　『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡』
『川田条里的遺構』
『石川条里的遺構』

長野市の埋蔵文化財第14集

石川条里的遺構
上駒沢遺跡

昭和59年２月25日印刷
昭和59年２月29日発行

編　者
発行人　長野市教育委員会

印　刷　長野市中越２９３
ほおずき書籍㈱